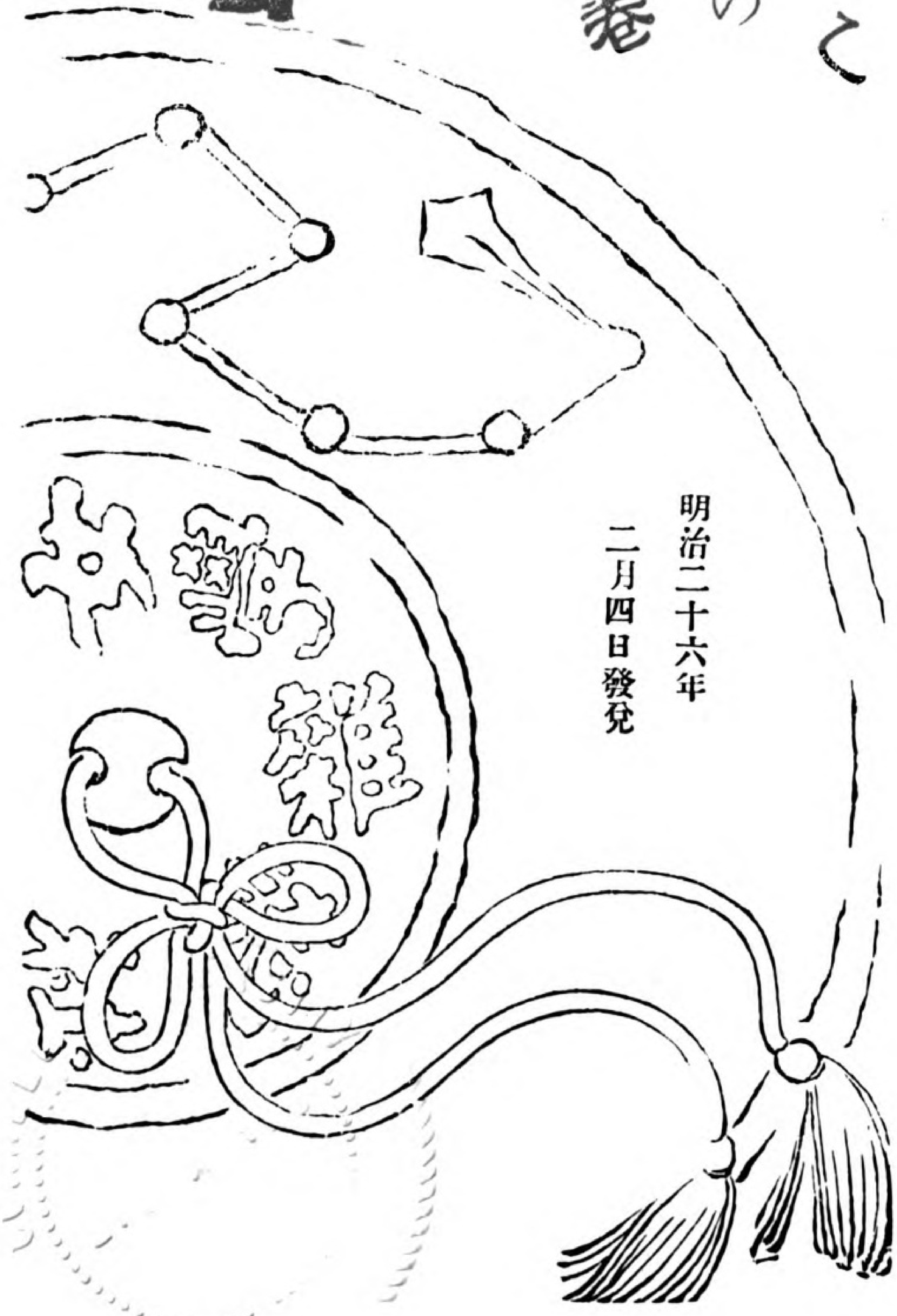
Feb. 1893
no. 337-2

女學雜誌

第三百三拾七號
乙の巻



明治二十六年
二月四日發兌

注意

○論說　婦人の大事業(松村介石)
○雜錄　ウニスト女史日本國觀察(上)。今昔物語(蜀山人の滑稽。臨終の用意。家康の注意。秀吉の慈仁。人を遣ふ人の心得)。神の兵(雲峯子)神の民(雲峯子)
○摘要　女子教育の妨害を排す。高等女子教育擴張案。孤女學院。ウエスト女史遊說一束。女教師女生徒の醜聞
○史傳　カノン、バットレル氏夫妻
○兒籃　我宿の花(若松しづ子)
○家政　鰯めし。えびめし。きうめし。ほしばめし。蠶虫の皮を脫く法。里芋はたもち。柚子餅。洋燈のホヤつぎ簡易法。ホヤの破裂を防ぐ法。瓶中の垢を去る法。衣類に赤土の付きたるを去る法。銅道具の垢を去る法。
○閑書　三宮義胤に送る(安枝武雄)
○通信　數件
○女報　數十件
○孤兒の友　孤女學院報告。北海孤兒院報告

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 337. FEBRUARY 4th. 1893.

EDITORIAL:—Woman's Great Work. (Kaiseki Matsumura.)

MISCELLANEOUS:—What Miss West Saw in Japan. Yesterday and Today "His Soldiers" "His People." (Poems) A Reply to the Question on Woman's Education. In Advocacy of the Woman's Higher Education. Orphanage for Girls. Miss West and her Work in Japan. Scandals in Regard to the pupils and teachers of Girls Schools.

BIOGRAPHY:—"Canon Butler's Life," (by his wife.)

CHILDRENS COLUMN:—The Flower of the Family." (A Translation.)

THE HOUSEHOLD.

本號（第三百三拾七號）目次

○論說　婦人の大事業（松村介石）

○雜錄　ウエスト女史日本國觀察（上）。今昔物語（蜀山人の滑稽。臨終の用意。家康の注意。秀吉の慈仁。人を遣ふ人の心得）。神の兵（雲峯子）神の民（雲峯子）

○摘要　女子教育の妨害を排す。高等女子教育擴張案。孤女學院。○ウエスト女史遊說一束。女教師女生徒の醜聞

○史傳　カノン、バットレル氏夫妻

○兒籃　我宿の花（若松しづ子）

○家政　鰯めし。えびめし。きうめし。ほしばめし。蠶虫の皮を脱く法。里芋ぼたもち。柚子餅。洋燈のホヤつぎ簡易法。ホヤの破裂を防ぐ法。瓶中の垢を去る法。衣類に赤土の付きたるを去る法。銅道具の垢を去る法。

○開書　三宮義胤に送る（安枝武雄）

○通信　數件

○女報　數十件

○孤兒の友　孤女學院報告北。海孤兒院報告

前週（第三百卅七號）白表

●社說　議會停會の飛報に接す

●論說　豪商界（下）商業の本道（天知子）

●史傳　日本の思想界に於ける情（下）棲月子佛教傳來と其影響（昧雨散人）

●雜錄　雜感（一）亂暴過激に二種類あり（二）知己と傳道（三）沈思瞑想（四）信仰より出る大勇（五）英雄の兩側面（六）人物の威儀（七）バプテズマのヨハネ（山月子）三日の旅（花園女史）箕子を讀みて（韻文）○探幽の鴫立澤を見て（韻文）殘花道人○此世（紫菀山人）

●批評　デビニチー○天啓教と聖書○中等唱歌

●開書　閣龍世界博覽會の費用並に其財源

●寄書　臆病者の十難、勇者の十德（養素子）

●片々

前々週（第三百卅六號）赤表

●社說　米國婦人禁酒會年會

●雜錄　在朝鮮日本婦人の希望。今昔物語。硬漢。昔の人今の人。風俗

●史傳　フランセス、ウイラード（其四）

●小說　內助（下）花園女史

●兒籃　吾が宿の花第八回（中）若松しづ子

●家政　家內重寶錄。饅頭製法。ぎゅうひ製造。生魚を酢にて貯ふる法。茶話會。田家のこよみ。農事の手當。園藝法、萠芽發生の解。

●理學　大風と指物師

●通信　各地通信數件

●女報　數十件

●孤兒友　博愛社孤兒院。孤女學院報告。北海孤兒院報告。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百卅七號　明治二十六年二月四日發兌

論説

婦人の大事業

松村介石

婦人の大事業とは如何なる事を云ふや。フランシス、ウイラードが禁酒運動に於けるが如きを云ふか。ナイチンゲールが看病事業に於けるが如きを云ふか。エリサベスフライが檻獄改良に於けるが如きを云ふか。メレイライオンが教育に於けるが如きを云ふか。エッジウオースが小説に於けるが如きを云ふか。ブラックウエルが醫術に於けるが如きを云ふか。デッキンスが慈善に於けるが如きを云ふか。フランシス、コッビが文學に於けるが如きを云ふか。抑々又ヨアン、デ、アルクが千軍萬馬の間に馳驅したる如き戰場の動作を云ふか。曰く否。予が茲に所謂る婦人の大事業あるものは總てかゝる類を云ふにあらざるなり。

然則婦人の大事業とは如何なる事を云ふや。曰く己れを教育するヿ即ち是れなり。

己れを教育するとは如何。和漢學に達するヿを云ふや。英語に長ずるヿを云ふや。裁縫を善くするヿを云ふや。家政、經濟、衞生、育兒、社會等の諸學科を習ふヿを云ふや。抑々又糸竹管絃等の諸藝に通ずるヿを云ふや。曰く否。予が所謂る己れを教育するとは總てかゝる學科若くは藝術を習ふヿを云ふにはあらざるなり。然則如何。曰く智德を養成するヿ即是れなり。

『智』智とは學識藝能等を云ふにあらず。時處位に應用する活智を云ふなり。男子にても女子にても愚痴鈍蒙ほど困りものはあらず。其心は率直なり。其愚は誠實なり。然ども人情に疎く、世態に暗く、普通の義理に明かならざるより到る處に人の物笑となるもの亦尠からず。而して先輩若しくは友母の之を見かねて教ゆるあれば則却て「自　爲　義」を以て之を拒ぎ。予れは世に媚び、人の機嫌を取るヿ能はずと云ひ。而して愚直頑鈍を以て自ら甘んず。此徒若し妻たらば屢々其夫の眉を愁いしむるものなり。若し子たらば屢々其親の面を赧らしむるものなり。故に曰く宜しく活智を養ふべし。如何にして此活智を養ふべきや。曰く此れ學識に由て得らる

べきにあらず、藝能に由て得らるべきにあらず。宜しく心を以て心を治め情を以て情を推すのコンモンセンスに通ぜざるべからず。如何にせば其所謂るコンモンセンスに通ずるとを得べきや、曰く謹んで先輩友母に聽き。而して自ら時處位に處して以て應用活智の道を學ぶにあるのみ。是れ實に難事なり。故に曰く己を敎育する口即ち一大事業なりと

『德』德とは眞善美愛の品性を云ふなり。世に德育を施すと云ふものに二種類あり。一は修身科を設けて以て講釋的に忠孝を辨ずるの類是れなり。二は講話に依り精神的に品格修養の道を勸むるもの、即ち是れなり。第一の類は害多くして効少し。予輩は寧ろ第二に賛成するものなり。然れどもよく／＼注意するにあらずんば今日の勢第二の類をして亦弊害を醸さしめんとす。此類は善く博愛を說き、義俠を說き、献身を說き、犧牲を說き、天道を說き、人道を說き、總じて眞善美愛の德を說き、小は一身の品格を養ひ、大は同胞の救者、國家の改良を以て任ぜしむ。是れ從來予輩等が勸めたるところなり。然れども其說き樣次第によりては、往々學生をして途轍もなき己惚に陷らしむるの恐れあり。予れ此類の人を視るに彼等は文明進歩の人を以て自ら任じ、社會改良を以て自ら居り世の先導者先覺者若しくは救者を以て自ら許す。是れ悪しきとにあらず。所謂る献身犧牲、博愛、義俠の精神自ら茲に出るや明かなればなり。然れども夫れ己れ先覺を以て自ら任じ、救者を以て自ら許すものなるが故に兎角に己惚に陷り易く、己れまた其人たる能はずして猥りに其人を以て自ら居るが如きの醜態亦た無しとせず。例へば人あり說て曰く。嗟、女學生諸君よ。女子の敎育は國家の隆替に關するや大なり諸君等は新日本女子の改良を以て任ぜざるべからず。女權擴張を以て任ぜざるべからずと。かく云はるれば輙ち直に其氣を受て起ち。動もすれば咄嗟其事に當らんとす。然れども何ぞ知らんや。己れ未だ其人たるの品性資格を養ひ居らざるとを己れ未だ其人たるの學あらず、智あらず、才あらず、德あらず、修養未だ足らずして而して慢然其人たるを期す。此故に事に當て非難百出。嫁して評判よろしからず。業を擧て事成らず。敎師となりて人服せず、傳道者となつて往々瓜彈せらるゝに至る。

人或は問はん。然れども一方に於て己に眞善美愛の品格を養

へよと勸むるにあらずや。然則國家の改良者、女界の先覺を以て自ら任ずるの外別に一個の德性を涵養しつゝあるが故に汝が所謂る己惚に陷るまじき理に非ずやと。曰く此故に說き様次第と云ふなり。かの献身、犠牲、博愛、義俠の精神、若くは國家社會を以て任ずるの覺悟は是非とも今日の男女學生をして之を有たしめざるべからず。然れども其說き様次第によりては已に前述の己惚に陷らしむが如く。今や一個人が德性涵養の道に於ても又々說き様次第によりては大なる癖事に陷らしむるの恐れあるなり。何を以て之を云ふ。曰く。德性涵養の業たる實に容易の業にはあらざるなり。一場の講話を聽て直に其業を成遂げ得べきものにあらず。一回の說敎に感じて直に其人たる事能はざるものなり。ペテロの如き曾子の如き人すら克己三省の工夫を積んで而して漸々に聖者たるの資格を具へたるものなり。然るに動もすれば信仰の道に入たるのみの故を以て。若くば暫時精神的の敎育を受たるのみの故を以て。頗る德性を涵養したるものと心得己惚。パリサイ人となりて而して自ら之を知らざるに至る。於此乎。己れ過誤あるも過誤と思はず、僞善なるも僞善と思はず。我儘なるも我儘と思はず。不禮なるも不禮と思はず。而して恬然自ら義として耻ぢざるに至る。恐るべき事なり。

此故に予輩は曰く今日女生をして學識工藝を學ばしむるの外猶ほ彼をして時處信應用の活智と德性涵養の要を學ばしむべし。即ち己れを敎育するとを勉めしむべし。是れ蓋し一大事業なればなり。ウイラルド。フライ。ナイチンゲール等は何故に能く彼れが如き大業を爲し得たるか。即ち我所謂る活智と大德を養ひ得たるが故にあらずや。智德は本なり。事業は末なり。本を舍て末を逐ふ。予れ其失敗の途たるを知る。

何故に今日女學が衰へたるか。蓋し此道の敎育を誤りたるに由る。此道にして已に誤る矣。入れば夫を慰むる能はず。出でゝ事業を成す能はず。人の物笑となり。世の誹譏となり。而して單に無味の鹽となりて捨てらるゝに至る。嘆惜の至りに堪えざるなり。然れども若夫れ此道にして已に得る矣。夫は喜び世人は感謝し。而して到る處に歡迎の聲を聞くに至らん。於此乎知る婦人の大事業たるものは即ち他ならず。先づ其身を敎育するに在ることを。

雜録

ウエスト女史日本觀察（上）

左の一篇は、ウエスト女史が「最新の日本」と題して、米國に通信し、ユニテン、シグナル雜誌紙上に掲載せしめたるものゝ譯文なり。蓋し、これ、女史が日本に着する后ち七日を出でず、直ちに寒を侵して進み向ひられたる北海道に於けるの所感を記するものなり。吾黨、今ま此文に對して、限りなきの情あり。此文の記者、今や世に無し。而して此文を記する時、其人の熱烈なる愛心は如何に燃つゝありし乎。あゝ、幽明、界を異にすと雖ども、人の精神は萬古滅すべからず。吾黨長久に此文を念はん。

日本の北端を北海道と云ひ其の首都を札幌と云ふ、東京より北の方は百哩の處にあり、此の地廿五年前は不毛の地にして只アイノ人種の住居するのみなりしか、時の內閣員黑田伯此の地に見る所あり熱心其の開拓に從事し、特に見習生を米國に遣し文明の事業を學ばしめんとせしが、不幸にして此れ等の見習生は文明を學ぶと同時に其の惡習をも幷せ傳へたり、此に於て伯は此の不毛の地に靑年を送り此處に敎育を完するを得べしと信じ、終に札幌に農學校を起し時の米國駐劄の日本公使森子に依賴して敎師を雇ひ入るゝ事となれり、當時森子の契約せる敎師は即ちアームホルストの農科大學長クラーク氏なりき、氏は一年の契約を以て此の地に來り特に黑田伯より道德上の敎訓に重きを置かん事を望まれたり。

斯くて學校は成立し東京より若干の諸生を送り來る事となりしが、其の內に伊藤氏なるものあり冒險の精神に富み他の諸生に先ちて來れり、然るに偶然の事よりして伊藤氏は一卷の英譯聖書を得たり、氏は未だ英語に未熟なりしも僅かに少許づゝを解するを得たりしが、幸にして女學校の敎師デンニス孃なる人ありて伊藤氏を招ぎ聖書の講義を聞かしにけり、始めの程は只語學の爲めのみにして靈性上の考を有せざりしが漸々學ぶに從ひ其の眞味を解し、孃の去りて後は全く悔改めて救主を求め洗禮を希望せしが、此處には之を授くるの資格あるもの一人もあらざりき、嘗て某敎師の此地に來るありしかば伊藤氏は請ふて洗禮を授けん事を望み敎師も承諾せしが何

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

處にても其の爲めに家を貸すものあらざりきと、依て止を得ずして屋外にて此の式を爲さんとせしが尙人々の妨ぐる處となりて果さず、此の時クラーク氏來着し東京より諸生も來れり伊藤氏はクラーク氏と共に熱心基督敎の爲めに力を盡くしつゝありし節英國敎會の敎師の來るありて終に氏は洗禮の式を受けたり、氏は之より益々斯の道の爲めに盡力し殊にクラーク氏八ヶ月の滯在は非常なる勢力を諸生間に與へ、終に十四人の諸生は救主を認め、基督信徒の同盟を契約せり、此の契約より今日札幌ある獨立敎會なるものは成立せるなりき、此の十四人の諸生は熱心に洗禮を望み敎師の此の地に來る每に洗禮を受け、其の八人はメソヂストの敎師により六人は監督派の敎師に依り此の式を授けられたり、左らば爰に敎派の異同を生じ、始めは敎師の指揮に從ひ八人の組と六人の組と各別に集會を開きつゝありしが、彼等は益々聖書を研究し基督信徒皆兄弟なるを覺り敎派の區別あるべからざるを信じ、終に書を似而非敎師に送り一同は基督を知りて敎派の區別あるを知らざるものなれば斷然分立するを廢する由を言ひ遣し兩組一致する事となれり。

斯くてクリスマスは來り新年に安息日は來り十四人樂しき春を喜びたりしが、何ぞ料らん其翌日メソヂスト敎會は書を送り若し諸生等わがメソヂスト敎會に屬するを否むに於ては敎會の設立費七百圓の返却を要求すと言ひ來れり、如何せん一同は淸貧の諸生如何で七百圓の金を拂ひ得ん、一同互に相見て困じ果て居る時何たる幸福ぞや米國なる校長クラーク氏より金百弗を送り來れり、當時金百弗は日本の百八十圓に當れり一同の喜び言はん方なく直ちに之をメソヂスト敎會に送り殘金は之を負債となし、諸生等が卒業の期に至る頃悉く償却するを得一同は一小敎會の持主となれり。監督派は彼の六人に授洗せし敎師を本國に歸らしめしを以て斯くの如きの困難あらざりき、只彼れ等六人は敎會名簿より除き去る旨申し渡されたり。

此の十四人の行跡を見るに只一人の墮落者ありし外悉く基督の良僕にして皆帝國の要地位に坐を占めたり、此の內二人は永眠せりと。

彼れ等の卒業後は多少の散亂を見たりしに猶札幌に止まりしものは在校の生徒と共に敎會の爲めに盡力し日曜學校を開き

五

新講會を開き後には札幌市下に五個の講義所を設くるに至れり、大島伊藤の二氏尤も説教に巧みなりしが大島氏は終に東京に於て教師就任式を受け札幌教會の牧師となれり、此れ實に未曾有の獨立教會なり。

北海道には四個の監獄署ありて重罪十二年以上の懲役に處せられたるものを此處に捕ふ、監獄署の役員屢々此の教會に來り教を聞きて大ひに感じ基督信徒となれるものありき、教會は是れを紹介者として監獄に福音を傳ふるに至れり、其の勢力實に著しかりしには看守人は政府に乞ふて公然政府より此れ等の教師を撰任あらん事を求めたり、此の要求は認可され今日は政府の命に依り熱心なる基督信徒道を監獄に傳へつゝあるなり、此の内三人は同志社より一人は一致教會の學校より來れるものなりと、彼等能く罪人を導き善良なるものとなせしかば今日は頑癖なる人と雖も之れ人間以上の力なりと信ずるに至れり。

今昔もの語り

秋玉庵輯

蜀山人の滑稽

蜀山人は通稱を太田直次郎といひ、蜀山人又は南畝と號す。幕府の勘定吟味役を勤め居たり。人となり洒々落々にして細瑾に拘らず、博學多識なれども之れを面貌に顯はさず、一に諧謔を以て不平を漏せり。其狂歌の如きは當意即妙人の頤を解き又卓落の氣象を見るに足るもの枚擧に遑あらずして嘖々人口に膾炙せり。されば今更之れを揭げ記するの要なきに似たれ共、山人の存生中其が家に學僕となりて、久しく山人に近接し居しものより語り傳へたる咄しなりといふを聞るまゝに其一二を記すべし。或年神無月の頃なりとかや山人の供して江戸近き邊の所の名は聞洩せり紅葉見にとて出行しが、途中にて紙の入用ありしに、忘れて懷になかりしかば、是を山人に乞ひ求めしに、山人紙入れを搜しながら笑ひて

ふところに小菊もきれてかみな月、顏に紅葉のちり紙をやる。やがて道側の掛茶屋に憩ひたるに、床几の足倒れて仰面に轉けながら

さしかゝる茶屋のせうぎの弱ければ、ヒシヤリといふてかくになりにけり。是れ等は余り世に傳へられたる歌にてはなけれ共、事に當物に觸て思案をも勞せず、口に任せて讀み出

るの一端を見るに足れり。其御勘定吟味役たりし頃は、幕府は御名高き松平越中守樂翁公老中となりて政務大改革の折柄にて、諸役所へも毎月幾回か儒者を差向け經史を講釋して諸吏に聽かしむる事となり、御勘定所へは東條琴臺といへる人を請侍して臨講せしめたり。其講義あるごとに山人は塗板勘定所に用ゆる品を持出て朱を以つて竊に點を付け居たり。傍の人之を訝りて其は何の爲なるやと問ひけるに、是は東條先生が講釋中サテといふ言を余りに澤山いふにより、一席凡そ何程づゝいはるゝや其數を取調べ居るなり、是も亦吟味役の職務ならずやと戯れたり。扨其次の講日になりしに、其事を傳聞したる人には、琴臺がサテといふ毎に成程と思ひて蜀山人の言を思ひ出し、クツ〳〵と吹出せり。講果て、後御勘定頭取は諸員に向ひ、何とて今日は席上靜肅ならざりしや、已後各相謹まるべしと誡めたるに、壹人之れに答へて、實は蜀山人がしか〳〵なりと告しかば、頭取も微笑し成程彼の先生はサテが多いやうだわいといひて其儘に濟せしが、扨其次の日になりては、頭取も亦可笑しくやありけむ、クツ〳〵の聲を洩せり。然るを此度は御勘定奉行之れを聞咎めて、頭取に向ひ何故ぞやと詰りしに頭取告るに其故を以てせり、是に於て奉行も亦成程と心付しかば次回の講日には奉行も亦殆んど笑ひ出さむとせりされど奉行は流石大名なればク……と込み上たる笑を忍びて態と咳一咳し、本日は拙者他の御用あれば、是にて退るなりとて中途に坐を立たれしと。是等山人の滑稽度々なりしかば、重役より申渡あり、御用席にては風流滑稽談は不相成と誡めたり、折しも西の丸にて御祝ひ事ありて、帛紗に鶴龜を其頃の畫工谷文晁に畫かしめ、其贊を山人にさせよと老中より傳へられたり。勘定奉行は恭やしく之れを受取りて山人に命ぜしに、山人面を改めて答ふるやう、曩日文事風流は一切御役所にては致す間敷由御申渡あり、其後は堅く御諚を守り居る事なれば、此義は眞平御斷申上たしと態と謹みて申せしかば奉行ハタと困りたれども尙ほ打返して、イヤ差留たるは平日の事なり、御老中より達せられたる御用向は、假令風流文事上の事なりとも此限には非る間、左樣心得早々執筆すべしと權柄にいひしかば、蜀山人畏りてさらば御役目にて取計ひ申可しとて直に御帛紗を拔き其裏面へ、「表書の通鶴龜の齡相違無之候」御勘定吟味役太田倘次郎と記し、巾着より實印

を取出し押捺して渡せしかば、御勘定奉行は大に驚きて其龜忽を怨めたれど最早其詮なきことなれば餘儀なく之れを持せて西の丸へ登城し、御老中に面會の上しか〴〵の由御詫申述ければ其事將軍の御聞に達せしに、將軍は御笑ひにて鶴龜の齡を勘定吟味役が證明せしとは面白し普通の賛せしよりは却て妙なりとて一層御機嫌能く、而して又彼が如きものには餘り、役向きを以て、縛らぬ方能きぞとの御意ありしとなむ。山人の磊落不羈概ね此類なりしといへり。

○臨終の用意

多くの人の中には、往々にしていふものあり。身の養生も老ては左迄肝要ならずと、されど假令ば一夜の宿りにも、雨露風漏りぬればいと便なきと多かるべければ、生命旦夕に迫る老人なりとて爭でか其身を大切にせでやあるべき。昔し松永彈正久秀信長に戰ひ負けて自殺せむとする時に臨み百會に灸していひけるは、我今の時に方り灸するを見る人定て何日の爲に養生するにやと笑止に思ふべけれ共、我常に中風を患ふるなれば、今や死に臨みて若しも俄に中風發り五躰も自由ならぬやうの事ありては、臆したりとて人々に笑はれむ事も口惜しく、又さありては我今日迄の武勇も徒勞になりなむ。百會は中風の神灸なれば我先づ其病を押へ置き而して心靜に切腹せむと欲するなりとて、灸を仕舞たる后切腹したり。其頃の人之れを聞傳へて、誠に名を惜む武夫の心掛は斯くあり度ものなりと何れも感じ合へりしとぞ。

○家康の注意

或時家康の御前にて近侍の士いろ〳〵談話の相手を爲し其際公の御意を得むとて、種々勝れて珍らしき事のみ申ければ、家康之れを聞きていへるやう、惣て談話は僞にても誠らしき事を語りては僞とは聞へねども、實事なりとて世にある間敷珍らしき事をいへば却て僞の樣に聞ゆるものなり。されば人は假令誠らしき僞をば語るとも、僞がましき誠は語らぬが上策なりと敎へられけるとぞ。强ち此言を格言なりといふにはあらねど、經驗あり思慮深き家康の言としては、大に參考に供する價値ありといふべし。

○秀吉の慈仁

秀吉名古屋在陣の節諸士の陣屋を見廻りしに、其が中に朧月夜と記したる額を掲げたる小屋あり。不思議に思ひて暫之れ

れを詠めさて是は誰が小屋なるぞと聲掛られしに、野間藤六といふ士出來たり。秀吉いと機嫌能き顔にて藤六敷物なきにやといひてやがて疊幾帖かに白米を添へて遣されける。是は彼照りもせずくもりも果てぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなきとの古歌を思ひ出での事なり、又或る處に在陣の節陣屋の空地にいと青々としたる蘭を植へ置たるものありしを見て長陣と見込たるものか、扨々ものに退屈せぬ奴かなとて是にも白米を遣されけるとぞ。優しき英雄の心情にこそ。

○人を遣ふ人の心得

堀丹後守直奇といへる人は、人を遣ふに至極妙を得たり。此多く人を取立てゝ之れを發達せしむると世に超へたり。一度此人に仕へたる侍は、諸大名爭ふて之れを求むるほどにて、爲に立身出世の階梯を得しもの枚擧に遑あらず、或老士多年此直奇に仕へたるものありしが、或人之れに問ひて抑何れの點が他主に超へたるといひけるに、彼老士答へていへるやう、手前主人義別段人の遣ひ方に他と替りたる事は無之、然し只一ツ異りたる事は、萬事從者に云ひ勝る事を宜しとせず、從者のいふ言を立む事を專ら好み候やうなり。是世上の人と替りたる處に候はむといひしとぞ。凡そ人の長上たるものは常に此直奇の如き心得あり度となり。

神の兵 (押韻)

雲峯子

一節

まことの帶を　身にむすび、
義の護胸をば　つけよかし。
いとも勇々しく　門出せよ。
いざうちいでよ。

(折かへし)

エホバの神は　いとつよし。
われらは何をか　おそるべき。
かたき武具もて　身によろへ。
いさみすゝめ。

二節

平和の福音を　くつにはけ、
仇なす惡魔を　ふみくだけ。

つひに眞理は　かちぬべし。
うちかつべし。

三　節

あくまの矢玉　雨なすも、
みかみをば楯と　たのむ身ぞ。
あだのいくさも　おそれじな。
おそれまじな。

四　節

すくひのかぶと　身にそなへ、
みたまのつるぎを　手に取て、
やみぢのあだを　うてよかし。
いざやうてよ。

神の民　（押韻）

雲峰子

一　節

をとめごよ　こゝろして、
汝がゆく　みちをな　あやまりそ。
かれゆく今日こそ　ふたゝび歸らね。
しばしもな　たゆたひぞ。

二　節

めをあげて　あほぎ見よ。
花笑み　鳥の音　たのしげに。
あまつ日うら〱　かゞやくみ國を、
みつかひの　こゑきよし。

三　節

ひとすぢに　とくすゝめ。
みかみの　みちびく　そのはせば。
たのしき家こそ　近きにあるなれ。
そのさまの　うるはしさ。

四　節

かぜにちる　はるのはな。
霜には　うつらふ　あきのきく。
みかみの園生の　幸あるたみぐさ、
とこしへに　榮えゆかむ。

摘要

○女子敎育の妨害を排す

細川潤次郎氏曰く、社會一般の形況稍鎭靜して女子敎育の弊も盖し大半を除却したり、全國女子敎育の隆盛に赴むき、從がつて就學者も日に增加するを見れば、世人の多數は女子敎育の有益なるとを認めたるものにして、前說（女子學問すれば生意氣となるとの說）の如きは、極端の論と云はざる可らず、極端の論に對しては、別に喋々辨明を要せざるべし。又本邦女子敎育の目的は、好配偶を求むる爲ならんも、决して玆に止まらず、盖し敎育は男女を論ぜず、普通敎育は、人間をして人間たらしむる者にして、文部省の設置あるも之が爲なるべし、女子敎育を普通敎育の例外に置くの理ある可らず。又女子は婚嫁して家を治め、子女を敎育するに當りても、敎育を受たるものと受ざるものとは、其間大に差異あるべし……封建時代の如く唯世襲の財產を保持すれば事足れりとするが如き時代にありては、女子敎育の必要少しとするも、之と事替り各人腕前の働に由りて生活を爲すの今日に在りては、女子は男子の片腕たるとを忘却す可らず。云々、女鑑第二十九號に見ゆ、細川君前日の女學生生意氣說に比ぶれば、大なる進步の說なり。君、末段に曰く、余は久しく此說を抱懷して未だ之を吐露するの機を得ざりしと。

○高等女子敎育擴張策

師範學校女子部を廢して高等女學校の設置に換ふべしと添へて題し、敎育報知第三百五十二號は論ずらく、婦人は實に敎授の業を視て以て其畢生間經歷す可きものとなさず、英國に於ては女敎師の在職十年に至るもの僅に二十人中の一人に過ぎず……苟くも其國狀の上に關して尙も十分なる男子に餘力ある我國の如きに於ては未だ女子敎育養成の特施をなすを要せざる可し。然れども、吾儕は之を以て高等なる女子敎育の淵源をまで杜塞するものに非ず、玆に各府縣に一の高等女學校を設立し、夫の尋常中學と相併行對峙せしめて特に高等なる女子敎育を爲さんと欲す。

○孤女學院

護敎第八十號の社說に曰く、吾人は平生世の慈善といふものを罵譏するを極めて遲きものなり。吾人固より獻身慈善の事業を聞かんとを欲す。憾むらくは世間往々名を義に假りて利を營む者あり終に吾人の心をして頑ならしめたり。然も大須賀君の孤女學院に於ける事業に至つては終に吾人をして淚零ちざるを得ざらしめたり。人間亦斯の如き人あり眞理未だ全く地に墜ちざる也。此事を始めより報じて怠らざりしものは實に女學雜誌記者となす、吾人は併せて記者の善く大須賀君を世に招介せしとを謝せざるを得ず

○ウエスト女史遊說一策

禁酒主義の雜誌中、吾黨は「護國の楯」を推す。故ウエスト女史我國に來遊中の運動を一束集錄したるもの、其第四十三號に見ゆ。

○女敎師女生徒の醜聞

五六の府縣會が女敎師の醜聞を以て女子部廢止の理由とするの謂はれなき、若し之を當然なりとせば、男敎師に醜聞多ければ是亦男子部の廢止を唱へざる可らず、天下豈に此の如き道理あらんや、然り而して醜聞固より醜なりと雖ども實際の數を調査する時は誠に僅々たるものにして百人に付僅かに一二人に過ざる可し、此一二人の者が醜聞を放ちたればとて九十八九人の者が敎育を受る能はずとありては誠に不公平なる次第と謂はざるを得ず。と敎育時論第二百七十八號は論ず。公平の論と云ふべし。然るに、同文中に、女生徒の醜聞は重に耶蘇學校としては私立學校に多くして、官公立學校生徒に割合に少きは云々と云へり、耶蘇學校とは宣敎師學校の謂か、之に醜聞多かりしや否や、たとひ其誤報多かりしとするも其實ありしや否や、常年吾黨の實地に穿鑿したる所を聞かんとを勸む。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

史傳

カノン、バットレル氏夫妻

英國のバットレル夫人は、彼國廢娼論の主唱者にして、二十五年間、小止みなく絶叫し、運動し、結合して、遂に、文明國の最大恥辱たるべき公娼制度を全廢せしめたる女丈夫なり。而して、此の女丈夫は、其家に在りて此上なき熱愛の賢夫人たり。何如に温かに其良人を助けたるかは、英國に於ての一の美談となれり。良人も亦た、男子が、其全力を與へて己が妻の事業の爲に助けたるとの好模範となりぬ。此の夫妻の伉儷には、吾黨が就て學ぶべきもの多し。

近代著書の多きわれ等の記臆にだも止まらざるが中に、カノン、バットラル夫人が其の夫ジョージ、バットラル氏に付て記せしものは、尤も注意すべき値あるものと信ず、之れ實に理想の一家を示せしものなり。

世に尤も快樂なるものは何ぞと問はゞ、一家の幸福は必ず其一つなるべし、而してバットラル氏の一家は此の幸福を有したりき。世には獨身にして潔く一生を送り以て一つの事業を起せしものは頗る多し、然れども一家を持ち人の夫たり人の妻たるの人にして幸福に且つ能く事業を立てしものに至りては誠に少し、此れ獨身者に比して一層困難なるが故か、然るにバットラル氏夫妻は此の後者に屬するの人なりき。一言にて評し去らば、氏の一家は英國中なる理想の家と云ふべし、若しルーシー、ハッチンソン氏の著「ハッチンソン大佐の傳」を以て尤も貴むべきの書とすれば、此の夫人の著決して其下に在ざるべし、カノン、バットラル氏の事業はハッチンソン氏の如く物質界に關するに非ず、氏の事業は夫人と共に社會の罪惡に向つての戰なりき、其の戰に於ける智勇果斷實に古の殉教徒も及ばざりし處あらん、其の傳記は一家の模範たるべく、以て神聖なる精神を養ふべし、更に其の傳記を草せし夫人の上には永く其の名譽と榮光とを歸せざるべからず。

漫に言をなすものあり、詩人の愛情は悲慘に終ると、思ふに一家の幸福なる詩人の如きものはあらざるべし、ロングフェロー、ロウェル、ホイッチアル等の如き皆然りとす、當に詩人

のみにあらず、傳導者改革者其他世の爲めに一身を捧ぐる人の一家は必ず皆幸福なりとす、或は言ふ世の爲に國の爲めに事をなすものは一家の幸福を完ふする能はずと、此れ何の言ぞや、若し一家の幸福を以て夫妻常に相對し相談笑するを以て幸福とせば其の言理あるべけんも、眞の幸福とは斯くの如きを言ふにあらず、夫妻の家に止ると否とを以て一家の幸福を定めとするが如きは誤れり、若し夫れ普通の人と雖も或は倶樂部に集會に奔走周旋せざるべからず、此れ果して一家の幸福を破るとするか、左らば人は悉く獨身者たらざるべからず、一家の幸福如何ぞ良人妻君の事業に關せんや。

夫妻の幸福を破るものは屢々相見ざるに然ずして、却て常に相見るの多きに因れり、斯くの如き一家は愛の眞味を知る能はざるなり、夫と妻と相和し左手の右手に應ずるが如くなれば幸福は其處に在るなり、夫妻各々務むべきの業をなし、終て相談し相食す、快味此處にあるなり、然らざれば夫妻或は惡魔の毒手に落る事あるべし、素より一家の事を思ふと公益を計るとは屢々衝突を起すが如き事なきに非れども、此れ亦憂ふるに足らざるなり、上帝の攝理は神秘なりわれ等己を委せて上帝に從ふべし、パットラル夫人も實に此の困難に遇ひたり、パットラル氏はリバープールの大學に長として且つ敎會の牧師を兼ね家事を顧みる暇あらざりき、家には兒童數輩ありき、社會の狀態を見れば猶ほ婦人の講壇に立つを以て怪しとせり、而して夫人は此の時に立てり、否な神の召を被りて立てり、立ちて十七年内國に外國に辨を振つて終に成功せり、思ふに神は其の事業に尤も困難なる人を選び給へり、然れども此れ神の深き聖意にして、世人は之に依り夫と兒童とを有する婦人も亦斯くの如き事業に堪ゆる者なるを認たり、或は夫人の働に依り一家は不幸を見たりしならんとの考を抱きしものも、今夫人の著書を得て却て一家の幸福なりしを知れり、而して夫人の外に在りて彼れの如き事業を爲し得とは、一家の快樂ありしが爲になりきと、其の夫聖哲パットラル氏の親愛なる補助ありしが爲めなりきと。

われ等の誠に賞讃すべきは夫パットラル氏の能く夫人を補助せるにありき、氏は夫人を敬愛せり、婦人を以て玩弄物視するものパットラル氏に鑑みて可なり、左らば此の夫妻の幸福なりしには如何なる秘訣ありしや、之れ實に三種の要素より

來る、其の一は夫妻の間に於ける神聖なる愛情、其の二は夫妻の靈性的生活、其のみは兩個が智力の同等なるにあり。

第一　夫妻の愛情

夫人バットラル氏に付て記して曰ふ「氏の品性は能く其の妻子に對する愛情に依りて顯れたり、愛情は氏が身躰の一部にして年と共に發達せり。年猶ほ若き男女能く相愛するを知る然れども氏の愛は青年の時にあらずして却て幾多世路の困難を陷んで益々深かりしものなり云々」と之れ實に氏の愛情なりき、夫人の妹も夫人に書し送りて云ふ「世には姉君の如く夫を慕ふものあらざるべし、神に次て姉君に力を與ふるものは夫なるべし云々」と夫人答へて言ふ「われとわが夫との愛情を知るもの少し、われ是れを詩歌に詠ぜんと欲せり、若し世人がわれ等の一家が如何に幸福なるやを知らば、必ず仰いで「天よ斯かる男子を地上に下す事多かりしによ」と云ふなるべし、われは實に夫に先ちて死せん事を望む、夫先づ死せばわれ如何にして生を保たん云々」と是れ夫人の氏に對する心なりき、氏の夫人に對する心如何、氏云ふ「われテニソンの「モウド」を讀み深く感ずる處なりき、われは悲哀なる情詩を讀む毎にわが一家の幸福を思ひ上帝に謝せずばあらず、われは妻を助けて神の賜ひし事業をなし、共に樂しく墳墓に入るを得ん云々」と一家の幸福思ふべし。

宗教――氏は決して夫人に對して己が權威を弄ずるが如き事なかりき結婚の前に當り夫人氏に何事によれ忠告あらん事を望みしに氏は夫人の行ひに付て間然する處なし、神に從ひて行ふに於ては他の忠言を要せずと迄言へり、夫れ氏をして斯くの如くならしめしは何ぞや、之れ即ち宗教に於ける確信にあるなり氏の心には一片不拔の信仰なりき、此の信仰能く夫人をして强からしめたり、此の信仰顯れて忍耐となり自重自信となり氏の高き品格となれり、世の誘惑と困難とは屢々來りて氏の一身を蔽たれども此信仰は中天の大陽の如く嘗て變ずる事なく雲霧の去や光輝故の舊く粲爛たり、然りと雖も愛情と宗教とのみにては未だ此夫妻が斯く親しかりし原因を説明し盡す能はざるなり、猶ほ要するものは兩個の智力なり。

智力――バットラル氏始てオックスフォルドの大學に地理學を講ずるや、夫人は夫を助て地圖を調査したり、共にダンテの翻譯を比較せり、殊にチョーサーの詩を出版する時の如き、常

に相對して英國古代の詩文を研究せりと、此の智力の同等なりし事其の親愛なる原因の一たりしや疑ふべからず。

左の一事は能くペットラル夫妻の間を示すものならん、夫人の手記せるものに云ふ「われ某の安息日教會にありしに前週過度の事業に疲れたるにや、俄かに心地悪しくなれり、人を騒がすは宜しからずと思ひて祈禱の半ば密かに坐を立ち、ぬき足して出で行きけるに途中にして忽ち雪の如き白き光顯れわれを抱きて外に連れ行き、冷たき處に坐せしめたり、之れ即ちわが夫なりき、夫はわが立ちしを知り直ちに走り來りわれを抱きしなり、白き光は即ち其の衣の光線に映ぜしなりき」と、此の一事以て兩個の一生を察するに餘りあり、夫人能く斯くの如く眞實に其の狀を書して憚らず、其の麗しき愛情掬すべし、之れぞ誠に此の一家幸福の大原動力なりける。

兒籃

吾宿の花　第八回（下）

若松しづ子　譯

一同この言葉を聞て口を禁み升た、暫らくして、ホイツテヤ主人は

わたくしだつて何も強いて其とをお勸め申すでは有ませんがネ、あの娘の着物を見るにつけ一途に思ひ迫つて、來て、今の樣に申たのです、なる程仰る通り、隨分不自由な生計をしておいでなさると見え升ネ。

ホイツテヤ主人は驚いたといふ躰で、

ナニ、着物がどふしたのだへ？何か不都合なとでも有つたのかへ？

いゝへ、なに、何も不都合といふ樣なとは有ませんよ、安つぽび目立ものをつけて居ない丈もわたくしは先づ好かつたと思ひ升たよ、併し現在あなたの姉さんのお娘御が寒中あんな見すぼら敷薄着をして此長旅をなすつたと思へば何ともいへないほどお氣の毒で、自分の住つて居る家や、着て

居る着物が恥かしくなり升したよ。

さうか、女といふものは非常な觀察力を持つたものだネ、どんな秘訣を用ゐるか知らないが、色のさめた脊負ルを一目見て、人一人の因果來歷を悉く看破して仕まふネ。彼のか愛らしい娘の着物を見て考へて見れば人一人處じや御座いませんよ、まだ〳〵色々分り升、そして顏つきを見て一層察しられるとが多くなり升ネ、まだ一言も交しませんけれど、わたくしはさう思ひ升よ、キツトあの若さに私たちなどは本で讀んだとしかないつらひ經驗を通つて居升よ。

夫はだん〳〵との妻の述懷を聞いていよ〳〵前非を悟り今は殆んど堪へ難き感じを免れやうとして、

サア〳〵、さうみんな夢中になつては困り升よ。

いゝへ、なに、夢中になるなんぞといふ處は少もないんです、たゞ人の困難を見て、それは私が幾分を自分に引受けて、輕くして上る筈のものだつたとおもへば、いつもかふいふ心地がし升のさ。

――ヘレンは俄かに、

おとうさま、そんなら、なぜ貧乏なのにいつまでも打遣つてお置なすつたの？

母は眼くばせしてヘレンを制し升たが、此方は一向それに氣づかず、御父にすり寄り、顏を赤めて父の顏を覗き込み升た。父は暫らく默して娘の顏を見詰め、

――ヘレンや、おやぢも今の樣に信徒らしくない時もあつたからネ。

かふ聞てからは、尙重ねて尋ねだてはしませんでしたが、これよりまだ知己にならぬ從妹を愛庇したいといふ心が急に强くなり升て、母の述懷を聞て起した考は吾儘勝手な考を總て追拂ひ升た。心の中に……どふにかして一處懸命樂しませる樣にして見よう、店へ寄つて氣に入つた買物もしよふし、好な本も讀ゝ樣にして上よふ毛糸も買て細工物をさせて上よふ、たゞ書物なにか讀むのは嫌らひかも知れない、若しさうならば、なんぞ外に工夫をして見ずばなるまい。

翌朝ルーセは眼覺て、着物を着替るにつけ又昨夜心に煩悶したとを思ひ出し升たが、これは眞のしばしのとで、食堂に這入つて、ヘレンの優しい挨拶振りを見て、乍ち心のうやむやも解け散じて、心ゆたけくなり升た。叔母が自分に對するも甚だ

柔和なのを見て、最初心一杯の待遇に逢ないと思つたのを今さら恥しく我心を責め升た。手に大きい新聞紙を持つて食卓に坐つて居つた人物はこれまで見ない小作りな婦人でした。

叔母は自分の手をとつて前へ進めながら、

ブリゴットさん、これは私の姪で御座い升よ。

この紹介の言葉を聞いて、名を呼ばれた老孃は急に椅子を離れ、仰々敷まで慇懃に挨拶をし升た。ルーセは譯もなく嫌に思ひ升た、さりとて其擧動は表面を飾る樣には決して見えませんかつた。この婦人は金壺眼を働らせて一瞬時にルーセの頭から頂天なら足の先まで觀察しながら、

どふも飛んだ好い處でお眼にかゝり升す、それにこの通り御丈夫らしく、櫻色をしておいでなさる處を見ては尙さら嬉しひ樣ですよこゝの方々はす、あなたがひどく御病身の樣に仰つていしたが、わたしはモウ胸三寸に何もかも承知しぬいてす、居升のさ、ナニサ、五十といふ好いとしをして、その位な人情が知れない樣では實にとし甲斐がないといふものでは有ませんか、だれしも若いうちは田舍住ひが嫌になつて、都の空か慕は敷なるものです、さうですとも、わたしにはよふツく分つてますよ。

ルーセは

いゝへ、わたくしは決して田舍を飽きた處では御座いません、

アヽさうでせうとも〳〵

といつてブリゴット孃は意味有げにうなづき升た。さて食事につき升てからもルーセは此婦人の眼が頻りに自分の上に走り廻るに氣づき升た。其視線が顏にあると思へば着物に移り、間もなく、銀の肉さしが戰て居た手に止り升た。ブリゴット孃は氣の毒さうに、

オヤ〳〵銀のフォークにはお手慣で御座いませんす。

ルーセは間の惡ひ樣子も見せず、それは不慣だと答へ升た。

それはよう仰つた、何事があらふと、いつも有のまゝをいふが一番です。

ルーセは心の燒へるほどのつらさが顏に現われて居れば、櫻色といはれるは尤だとおもい升た。食事が終るや否、ヘレンは人知れぬ處へルーセを引連れて耳にさゝやき、

あなたブリゴットさんを氣におかけなすつてはいけませぬ

よ、なれてしまへば隨分好い人ですけれど始めは本統にたまりませんよ。何をいつてもしても氣に掛けない、平氣だといふ處を見せてお遣りなさひましよ、さうすればいつかからかはなひ樣になり升よ。

それでも、一向氣にかけなひといふ譯にも參りませんネ。

それでは仕方が有ませんからあなたがあの方にお出合ひなさらない樣にしませう。ナニこゝにいつでも居る譯ではないのですよ、今の處下宿やを探しますといふので泊つて居るのです。先の下宿やから燒け出されてネ、こゝへ來たのですよ、でもあの方を笑わない樣になさひよ、かあさまが嫌に思ふといけませんから。

どふいたし升て、笑ふ處では有ませんよ。

アレ、あなたは何も可笑とはないよ、いつでも今の樣にまじめで嚴肅な方ですか？

ルーセは笑ひながら、

でも御飯の時に仰られた事は私の氣分を浮〳〵させる樣なとでは有ませんかつたもの。本當にお氣の毒でネ。

アレ、それもモウ直きなほり升よ。たゞうつかりして居た處でしたから驚き升たのです、今まで御承知の通りうちに斗り居り升で、少しも世間を見たとが御座いませんからネ。妙な人がキット澤山居るのでせう。

ヘレンは

さうに違ひ有ますまいけれど、わたくしもあなたも同じ樣で、ろくに世間は存じませんよ。それはさうとわたくしは朝飯のあとはいつもゆつくり運動をいたし升よ、一處に入つしやい升か？

ルーセは少し躊躇しながら、半分は冗談に半分は眞面目に、

あなた田舎者と一處にお歩なすつてお恥は有ませんか？

なんのまあ、そんなと、

とヘレンは心よく言ひ升て間もなく、ルーセは頻繁な町中の群集の中の一人となり升た騷しひ音に心は亂れ、壓倒されさうな混雜の最中に身を庇ふと、忙敷、ルーセは店先に幷べて有るさま〳〵の美事なものに氣を止ることも出來ませんかつた。

ヘレンはあれやこれと案内しつゝ先へ〳〵と急がせて居ましたが、フト足を止めて、

あなたはこんな人ごみに歩るくとがお好ですか。
いゝへ、好處では有ませんよ、人ごみでない處へ出られませんのさ。そんならキットあなたと氣が合升よ。私も人ごみ嫌ひですもの。
最早此事には同感の情を結びつけられて、兩人は互に悦び滿足して家路を歩み升た。

家政

家内重寶錄

ふみ子

鰯めし　水加減通常に仕かけ、火を引かんとする前方鰯の頭と腸を去りて能く洗ひたるものを逆さに飯の中へ差し込みて、其後火を引くべし。夫より能く飯のむれたる頃差込たる鰯の尾を引立れば、骨は悉く付きて抜けるなり。其後飯を上下に能く攪き交ぜて櫃に移すべし。煮出しいろ〳〵に拵らへて之れにかけて食するなり。

海老飯　車海老にても、鎌倉海老にても鹽にてゆでゝ皮を去り、隨分細かに引裂きて偖煮きたての飯の上へばらかと置きて、適宜の煮せし汁をかけて用ゆるなり。

鯛飯　鯛の皮を去りて身をさいに切置きて、鯛の洗ひ汁にて米を仕かけて焚き火を引く前に飯の上へ置くべし。汁は是もすましにて味は適宜。

雉子飯　土佐の上等鰹節を煮出して飯を仕かけ焚き、雉子は骨と皮とを去りて身ばかりをゆで、細かく裂きて飯の上に置き出すべし。是も煮出し汁をかけて食するなり。

菜飯　菜を擂りて其汁にて焚き鹽少し入れて加減すべし。薯藷をさいに切りて入れても宜し

干葉飯　冬日大根の葉の隨分柔らかき所を陰干になし置き、飯に焚んと思ふ時は能く揉み洗ひ莖を去りてザット湯を通し細かく刻みて磨きたる米に交ぜ、鹽加減して炊ぐべし。

どら焼しんじよ　鯛鱚の類は身を擂りて、山の芋をおろして之れに擂り交ぜ、之れを煮出しにて溶き鹽加減して小杓子にてすくひ焼鍋にて焼くなり。但きんつば焼の形にするなり

蠶豆の皮を脱く法　蠶豆は之れをザッと煎り灰汁にて煮たる后擂り鉢に入れて擂る時は、其皮都合能く剝げるものなれど夫よりも簡便なるは炭酸曹達を入れて煮る法なり。則ち重炭酸曹達少量を入れてザッと煮立て、未だ豆の柔らかくなら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ざる前則ち一寸指を觸れて試むるに、其肉潰れずして皮のみ脱ける位を度として之れを擂鉢又は桶に入れ手にて攪動すれば自然に皮脱けるなり。

里芋牡丹餅　里芋の皮を剝き芋一升に粳米五六合の割合にて之れを混じ通例の飯の如くに炊ぎ。擂木にて搗き碎き之れを圓めて餡又は豆の粉胡麻等をまぶして食するなり。通例の牡丹餅よりはツル〳〵として口觸り能く咽喉へ辷り込なり。

柚餅子　柚子の黄熟したるものを採り庖丁にて其一方を横斷し其中の肉を抉出して之れを揉み碎き、其液にて蕎麥粉を捏ね砂糖適宜胡麻少許を加へて再び之れを捏ね柚子の殼に詰め込み蔕に切離したる皮を蓋として緊しく之れを合せて尚ほ其上を藁にて縛り釜に入れて一旦之れを蒸したる后冷却せしめて藁に包み空氣の流通宜しき處に垂下し置き入用の都度取出して茶菓に用ゆるなり若し餘りに乾燥したる時は布帛を湯に浸し之れを以て適宜の濕氣を與へ庖丁を加ふるに便利ならしむべし。

又柚子を砂糖漬とするには、之れを輪切りになして蓋物に入れ砂糖を能く振り掛け置きて五六日經たる后之れを取出し食すべし

とろゝ汁を食せむとすればきれて風味悪しくなり易きものなり。夫れには生栗を一個おろし芋に交ぜて擂るべし、然る時は切るゝ患ひなし。

洋燈のホヤ繼ぎ簡易法　洋燈のホヤ破壞したる時之れを繼ぐには、米飯を塗りてソクヱとしたるものに、白砂糖を等分に混和して其破れ目に塗り付け能く之れを合せ置時は久しきに堪へ得らるゝなり。

ホヤの破裂を防ぐ法　陶器などを湯煮するが如くに、之れを使用するに先ちて一度湯に浸して熱を與へ三十分程經たる后に火より取除き、湯の全く冷水に復する迄其儘に放置し而して取出して能く拭ひ用ゆる時は其質餘程強硬となるなり。

瓶中の垢を去る法　硝子瓶又は牛乳を入るゝブリキ瓶などの内部を清潔にするには、木炭の細末を水に和したるものを瓶中に入れて能く之れを振るか、又は小豆一撮を入れて其口を塞ぎ、之を振るも好し。

衣類に赤土付たるを去る法　赤土は通常の土よりも落ち難き

ものなり、之れを洗ふには生姜をおろして洗へば奇麗に落るなり。

銅道具の垢を去る法　銅の茶瓶又は盥等の汚れ古びたるは、梅酢にて洗へば奇麗になりて新しきもの丶如くなる。

　鱈肝油を容易く飲む法

大坂毎日新聞に、渡邊治氏が實驗上の説あり、僕は乃ち自ら一法を案出し、肝油は流動躰なるを以て其特効を損せずして之を固形躰に變ぜしめんが爲め、澱粉質の粉末を加て之を練り、其表皮に藥用麩を掛け、俗に白玉と唱ふる搗抜き團子の如くに製し、三個乃至五個づゝ食事の度に用ゐるに彼の惡味絶て存ぜざるのみならず、僅だにも其惡臭を嗅ぐことなく、喉頭をスラ／＼と心地よげに通過せしなるを得、愉快言ふ可らず、而して、之に健胃劑を加へ下痢の時は上痢劑、秘塞する時は下痢劑に添ゆるを良しとすと。

田家のこよみ

斎藤子編

○雨水二月十八日　○土脉潤起　○霞始靆　○草木萠動

○二月六日より二月廿日迄農事園藝

○播種　早茄子、早胡瓜は床蒔になし夜分は霜除の手當すべし、柑橘類、杉、檜、扁柏、楓杼、巴旦杏、桃、栗等は倶に三月中旬迄に播種すべし。

○移植　松、櫪、竹類、櫻桃、楡、槐、海棠等は此節より移植してよし、但し竹類は去年の新竹を可とす。

○分植　韮、酸漿、は三月中旬迄に根分して可なり。

○二月六日より二月廿日迄農事手當

○梨、林檎、梅、桃、李、夏果樹類は成べく此節に冗枝を剪込みて怠らず諸事に注意すべし、但し果樹の切口なる皮を損ぜざる樣なし、鋸の切跡は小刀を以て削り蠟又は蠱をぬり置くべし。

○牛馬羊豚　の類は此期節に分娩するもの最も佳なり、故に姙娠せる畜類は及的溫暖淸靜にすべし、飼料も成べく暖き物を與へ、決して氷凍せしなんどの食を與ふべからず。

○苗床　は此季にすきかへし、霜に曝して、惡しき草根を取り去りぬべし、專ら彼岸播種の要意すべし。

○園藝法

第二　果木の結果を促す法

果木にして其成長活潑に過ぎて、果實を結ぶに至らざるものは、果木に花芽を發生せしめ、或は既に結果力を有するものも、尙一層結果せしめんとすれば之に、偃枝法を行ふべし。今其法を擧れば左の如し。

(一)樹枝の方向愈よ直直に近ければ、之に生ずる小枝の養液の注入すると愈よ多く隨て小枝の生長活潑となり、之に反して大枝を彎回にすれば、小枝の勢力を減殺して、花芽の發生を促すなり。

(二)枝を彎回すれば其樹皮及び樹質一側に伸び一側に縮みて、養液の環流を緩慢にならしむ。

右偃枝法を行ふに。枝を架上に屈伏せしめて結束するもよし。又枝の末端に小石を結び着るもよし。又枝を縄糸等にて他の樹木に結び着るもよし。かくすれば風雨の害を蒙ると蓋し少なし。右の法を行ふには三四月又は七八月を可とす、而して花芽の夥多發生する時は、枝を緩放すべし、然らざれば枝の衰弱を來し、花芽に多量の養液を送ると能はざるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

女子撰擧權に關する卓論集（二）

人は女子の撰擧權に付て論ずるや必ず其の難きを述ぶ、然れど投票には正義の心と常識とを有すれば可なり、女子若し之れに堪へずとせば世の母には兒童の敎育を託すべからざるならん――ジヨーヂ、ケーブル。

女子にして鐵道株を所有するものは其の會社に於て投票權を有す、此の人若し此の株を賣りて一家を買はゞ終に其の家に關する事に付ての投票權を失ふ、工業上の一會社には之を許し一國の政務には許さゝるや正義の觀念を有するもの、默止すべからざる處なり――ジヨーヂ、コルチス。

女子の撰擧權を得るは神の攝理なり、之れ聖書の精神と歷史上の經驗とに依りて明かなる事實なり――敎師ライト。

余は幼少の頃より女子の撰擧權は至當なる權利にして國家の利益なりと思へり、爾來經驗と思想とは益々此の主義を固くせり――監督ポーマン。

吾人は女子にも投票權を與ふべきなり、女子の撰擧場にて妨害に遇はん事を恐るゝは杞憂の至りなり、女子は嚴然として撰擧場裏に出づべし若し之に妨害を加ふるものあれば彼の鯨がヨナを飮みし如く群集は其の人を飮み棄つべし――ヘンリーワード、ビーチヤル。

女子の撰擧權に關しては多くの先入せる偏見ありて之に反對すれども之れ等は一つも眞理に非ず、眞理は常に之を是認せり――敎授パウン。

女子に自由なる權利を與ふるは、女子の爲め國家の爲め一擧兩得の道なり――敎師チヤールス、スウヰング。

余は信ず、女子に投票權を與ふるの時機は來れり女子の智力と良心とは必ず正義と道義との爲めに投票すべし――監督ホルスト。

余は信ず、投票權は女子の手に迄で及ばざる以上は大都府に行はるゝ大罪惡は除き去る能はず――監督シンプソン。

政治の腐敗を矯正するものは何ぞと問はゞ女子の助けを要すと答へん――監督ヘブン。

吾人は女子の撰擧權に反對なる人々を斥けたり、之に反對す

る者は悉く米國獨立の檄文の主義を否むものに非るばなし—ジヨージ、ホーア。

われ若し少許の勢力にても有するならば、夫は女子撰擧權の爲めに擴張せらるべし——マリア、チヤイルド。

何故に女子は撰擧權を有せざるや、何人にても法律の範圍に在るものは之が執行に可否を言ふべきは共和主義の精神に非ずや——敎師ピアポント。

余は女子の撰擧權に關する反對賛成の兩派の主張せし處を盡く讀みしも未だ何故に之を許すべからざるやの理由を見る能はざりき——エム、サベージ。

女子の撰擧權に關する確信と其の成功の希望と之に依りて得る勢力を望む事とは年と共に益々加はれり……ルイサ、オルコツト。

法律の支配を受たるものは其の法律の可否立法家の離れなるべきやを言ふの權あり、女子も男子の如く政務に與り代議者たるべきものなり——ウヰリアム、ガリソン。

男子が投票權を有すべしとの議論は必ず同じ力を以て女子も投票權を有すべしとの論に應用さるべし——ベンヂヤミン、ウエード。

女子と雖も男子の如く共和國の人間にして同等なる社交上の地位を保つ故に余は女子の撰擧權を以て先つ正當なるものと信ず次で余は多くの先入を破りて之を與ふべきの理を數多發見せり、其の理とは即ち女子は男子に勝りて道義上の高潔なる觀念に依り投票を清潔ならしむべし、活氣ある女子の智力を以て社會の問題に判斷を與へ得べし、責任あるを以て女子自を強すべし、兒童は完全なり發達を爲せる母を得べし、此等を數へたら人には限なかるべし——ハリエツト、スポフルド。

余は女子に市民たるの資格を與へ政務に與らしむべきを信ず何んとなれば女子の一家を治むるに拙なる者は稀れなり、彼れ等は一國の出納院長の如く財產を浪費せざるなり、若し女子の組織的智識を一國に應用せば必ずや大ひに經濟的、便利的なるものあらん——シオドル、パーカー。

笑はゞ笑へ、嘲けらば嘲けられよ、議院より追ひ出せよ、左れど婦人問題は益々地平線を越へて登りつゝあるなり、遠からずして此の問題は其の說明を見ん——ジエームス、エー、カーフヰルド。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○女權回復請願の議院請求

曩に、横井たま子外三百三十八名より請願したる、邪淫罪に關はる刑法の改正案は、請願委員長の極めて冷淡なる報告と無情放埒なる若干議員の冷笑との間を沒し去られんとなしつるに、衆議院中、人なきにあらず、過日、左の如き請求書快ちよく現はれ出でたり、

夫れ天賦人權の重んずべき誰か之を非議せん而して我刑法第三百五十三條の如きは實に女子の人權を蹂躙したるものと云はざるを得ず是れ横井タマ外三百卅八人が本院に向つて此請願書を呈出したる所以なり抑我衆議院は人民權利の擁護者を以て自任するものなれば事苟も人民の權利に關するものあれば宜しく審査熟議をなし以て其分を盡すべきなり然るに我請願委員は本件を以て院議に付すべきの價値なきものと認定し同委員長は其決議を議會に報告せられたり然れども本員等は敢て其議に服從する能はず本件は採擇すべきものと認む因て議院法第六十四條に依り本件を院議に付すべきを要求す

明治廿六年一月

要求者

野口褧　千葉禎太郎　小西甚之助　津田眞道　瀬戸岡爲一郎
江原素六　立石寬司　加藤淳造　河島醇　關戸覺藏
原善三郎　石坂昌孝　永井松右衛門　浮田桂造　古莊嘉門
高梨正助　波多野傳三郎　青山朗　愛澤寧堅　小笠原貞信
嘉悦信之　鈴木重遠　金井貫　吉岡倭文麿　武市安哉
齋藤勘七　佐野助作　丹後直平　森東一郎　杉村寬正
横井善三郎

衆議院議長　星亨　殿

國民輿論の壇上にて、かゝる公平の聲叫ばれたり。もとより法律は國風と共に制定すべく、必ずしも先天純理の議論のみにて決すべからざれば、此請願を容るゝと否とは、大ひに論議すべき所のものあらんとす。左れど、其論理を聞かず、其是非を究めず、冷然として幾百熱血の人の請願を馬耳東風に附し去るときは、苟も代議士たるものゝ爲すべき所ならんや。吾黨は、必ずしも玆に改正案を全納せよとは强ず、先づ其忠實なる討論の開かれんことを熱望し且つ强求するもの也。

○輸出税全廢同盟婦人

輸出税全廢を請願せんとて、前橋の工女三千人は左の主旨にて願書を提出したりとぞ、

妾等數ならぬ身には候得共上は國恩の万一に报ひ奉り下は父母の慈愛に答へ參らする心より夙夜孜々養蠶製糸に從事罷在り候得共蠶業には年の豐凶も之あり相場の變動も常なく其逆境に際しては身力を盡して製造仕候も意外の困難を蒙むり候事實に少なからず候憐れ輸出税を全廢せられ此困難を救濟せらるゝ樣御取斗被下度懇願仕候也。

女人の聲の世に聞ゆるといよ／＼高くなりぬ。

閑書

○三宮義胤に送る

安枝武雄

敬愛する女學雜誌記者足下足下倍々健康邦家の爲め慶賀々々小生去る二日夜奇怪なることに遭遇せり即ち式部次官三宮義胤外國婦人四名を伴ふて吉原の大門に入らんとするを見たり巡査によりて其名刺を見確かに三宮なるを知り憤激に堪へす歸途を擁して大に耻かしめんと待受け居たるに巡査余を壯士と認め常ならざるを知り終に三宮を外路より逸せしめたり余之を覺り巡査を大に詰りたり然れ然れども目指す敵は既に去りたることにて詮なく空しく怨を呑んで歸れり其后各新聞社を訪ひ筆誅のことを談ぜしも一新聞だに同情を表するなく遺恨至極なり足下幸に小生の微を推し社會の爲め同情を掲給はゞ喜び不過之なり頓首々々

一月七日　安枝武雄

女學記者御中

編者附して申す。此書旅行中に着して落手延引しやうやく本號帋上に掲ぐることとなりたるなり。

式部次官三宮義胤君足下、余は足下が去る二日午后第七時四外國婦人に陪して北廓に入らんとせるを見たり、余初め足下を識らず之を巡査に問ひ足下が巡査に與へたる「式部次官三宮義胤」てふ名刺を見て即ち其足下なりしことを確めたり、余は足下の怪行を見て頗る憤慨に堪へず爲めに大に談ずる所あらんと足下を歸途に擁する多時、而して終に逢着の榮を得ず誠に千歳の遺憾なりし。

咄、　宮義胤君足下、足下は北廓を以て何等の處とか爲す、之れ邦家醜穢の匯集せる賣淫塲にあらずや、たとへ走利の小人通辨の利を貪りて外人を此地に誘ふも識者は將に其面に唾せんとす、足下職を式部の次官に奉じ邦家の典禮を重んじて外賓を待すべきの大任を擔ふ、而して終に此幇間的行爲を學ぶ、余の足下の骨を屠り肉を食ふて猶ほ飽かざらんとするもの、豈一の三宮義胤に拘々たるが爲ならん帝國人民たるの義止むべからざるものあればなり、足下職を式部次官に奉じ身を至尊に咫尺し奉りながら此小人猶ほ爲すを耻づるの行を爲す、嗚呼又何の心ぞや足下の心に以爲らく外人を待するの道一に彼の鼻息を窺ふにあり、國家の體面を毀傷するも一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

身の重職を耻かしむるも若し外人の歡心にし得べくんば膝行足指にする亦た其辭せざる所なりと、然れども　至尊の足下に任じ給ふ所豈斯の如くなるべけん式部職の足下に命ずる所豈斯の如くなるべけん、要之　外賓を敬禮接遇する所以のもの、邦家の躰面を維持して國輝を世界に光被せんとするに外ならず、今や足下は邦家の躰面を擧げて以て外人の買歡心に資す豈又冠履倒置の甚しきに非ずや。

三宮義胤君足下、足下の外人崇拜の癖あることは人皆之を知る、此一事既に足下の外賓接待、特に皇室の外賓接待の職に適するや否やを疑ふ、昔は幕吏新井君美の朝鮮使節を江戸に見る彼玄冠緋砲劍を按じて進む外使震攝、人稱して國躰を耻かしめずとなす、今足下の行爲を以て君美に較す果して如何の感かある余の開書以て足下を責めんとするもの實に玆にあり。

然れども余豈敢て漫罵壯語自ら快とするものならん、足下の行爲にして足下一人に止まらしめば或は齒牙の餘論を辱ふするに足らざるべし而も天下曠職者の多き曠職者の多き足下は之れ一の標本人たるに過ぎざるなり、余の聊か足下を筆誅する所以のもの之を以て幾多魍魎の膽を破らんと欲する徴衷のみ、足下覲あらば預り聞かん覲なければ速に其職を去れ

余は足下を以て職祿を私するの小人として信ぜんよりは足下の這般の行爲を以て其悔悟日月の蝕の如き君子人に擬せんことを至願々々。

通信

淡海子編

●高知縣通信

◎高等女學校　去る頃東京通常會に於て、尋常中學女子部を廢し、新に高等女學校を設立せることゝなりたれば、此度縣廳にては、東京尋常師範學校長村岡尙功、尋常中學校長中村一氏、教諭尾原亮太郎、同近藤寅之助、雇教員安藝牛五郎の五氏を高等女學校規則取調の委員を申付られたり。

◎高等師範學校　本月十二日午前第九時より兩三日間東京師範學校教室に於て高等師範學校入校女生の撰拔試驗を擧行せらるゝ由其人名は師範學校生依岡愛、川村榮、植木香小枝、井上茂代、中學校生山田加滿、一圓豊、澁澤津多衞、同卒業生、白石德、秋澤駒衞、松山金枝等なり。

◎佛教婦人會　安藝郡安藝、伊尾、木安田、田野、奈半里等の有志者は先年來佛教婦人會を組織し、中島智晃、須賀直丸等の諸氏之れが牛耳を執り、佛教擴張を計り居られしが、追々盛大に赴き會員數十名の加入あり、去る七八兩日は高知より竹中茂麿師を聘して演說會を開きしが非常の盛會なりしと云ふ。

◎演說會　去る九日高知教會の婦人諸氏の催しにて、此度土佐傳道の爲め來縣中の、松田順平、岩本善治兩氏を聘して同地堀詰座に於て、對婦人演說會を開かれたり、松田氏は(婦人諸君に望む)岩本氏は(當今の婦人問題)にて熱心懇篤に其說を辨ぜられたる故、千五百餘名の聽衆に靜肅に謹聽せり此會を開くにつきては片岡健吉氏等の夫人は一方ならず奔走盡力せられしと云ふ。

◎教員　此度小學校教員二種撿定の上、東京小學校教員免狀を得たる婦人小學校本科に一人准教員、專科正教員に一人、專科准教員に六人、尋常科本科准教員六人ありたり。

●三重縣通信

◎養正學舍卒業式　昨年十二月二十一日には養成學舍(女子の學校)第三回卒業免狀授與式ありぬ、卒業生は三名ありしとぞ。

◎溫故堂產科私學校新年開業式　當市溫故堂產科私學校にては、例年の通り去る七日午后一時より新年開業祝宴を開きしが、當日參會せし人は殆んど八九十名に達し、最初に山內校長は敎語を捧讀し、尙ほ開會の趣旨を述べ、次に卒業生總代池田うめ子の祝文、及増山なほ子の演說あり、式終りて祝宴を開きしとぞ、當日產婆一同より校長に贈りし鏡餅は三俵取りと稱へて、直徑六尺に餘る見事なるものなりし。

◎女子高等師範學校入學試驗　去る十三日より本縣廳にて、女子高等師範學校入學試驗を執行せり、其受驗者は、草川よし子、村井さみ子、大林やす子、有馬しづ子の四子なりし。

●會津通信

◎若松婦人會　同會は去月二十日午後七時より若松基督教會堂に於て總會を開き客年中の事務報告會計報告等ありて、規則の修正を爲し、全國皆兵の理を應用して會員皆部署を定めて各自に働くことゝなし、全會を分て、傳道部、慈善部、矯風部、慰門部の四となし、部毎に部長一人を置き萬事敏滑に處理するの目的を立てたり、後役員の改撰及び新撰を行ひ左の諸姉當撰せり。

(會頭)　內田保子　(副會頭)　海老名會子
(書記)　木下秀子　(會計)　酒井高子
(傳道部長)　佐々木敬子　(慈善部長)　服井竹子
(矯風部長)　羽生光子　(慰門部長)　矢島藤子

全會が今日迄成し來りし所は、毎月二回の例會には諸種の講談懇話等あり、其他女學に關する書籍雜誌の購讀をなし時々慈善の爲めに募金して不幸可憐の人々に同感を表し來りしが今后は更に之を擴張し、之に加へて傳道の爲め矯風の爲めにも力を致し兼て病人不參者をも慰問して、いよ〳〵此會を盛にせんとし今や新會員をも勸誘なし居れりといふ。

◎喜多方婦人會　は昨今の創設にして、毎月二回相會して家政衞生其他女子に關する講談あり、會するもの二十名前後にして地方名望家の細君等にして來會するものあり、前途有望なりといふ、其主義とする所は明ならざれども、之が發起者は同地にある基督教徒なりといふ。

◎本鄉婦人會　は數年以來存在せりといへども、委徵振はず目今の如きは有て無きが有樣にていと遺憾なり、只熱心者の起りて再擧せんことを期するの外なし。

●京都通信

◎京都婦慈善會　は去月京都府高等女學校に於て開會せられ甚だ盛會なりし、餘興には京都盲啞院兒の音曲を奏せり。

◎伏見の婦人會　同會は多くクリスチャン婦人にて組織せられ日に盛なりと云ふ

●長野通信

◎上伊那誓矯風會　本會を長野縣上伊那郡東箕輪村長岡に設立す其約束は左に

本會は參誓矯風會と稱す
本會は德義心を發達し社會の改良を基とす
本會員の責任として左の條項を履行するものとす
　婦人を敬愛し猥褻の言行あるべからず
　飲酒せざること
　信義を守り不信の言行あるべからず
　妄りに誹毀を談ぜざること
　凡て卑褻の言行を愼むべし
本會の目的を達せんが爲め左の事件を行ふものとす
　演說　談話　討論　雜誌　講讀
本會員を分て普通會員名譽會員の二とす
普通會員は直接に本會員たるもの名譽會員は推薦に依るものとす

本會に入會せんと欲するものは會友の紹介を得て總會員の許諾を得べし
本會の總會は毎年一回とす例會は毎月二回とす
目下會員三十名計り實に微々たる會なれども、會員皆熱心に働き居られぬ。

●高知通信

◎高知育兒會　同會に於ては廿六年度豫算議定の爲め去十七日常設委員會を開きたり

◎感心なる老婦　高知市北奉公人町二百六十五番地平民商長野熊次なる人の母谷岡芳女は兼々我國に於て屍體解剖をなすものは曾に囚人若くは極貧のもの丶みにして、普通の人々は進んで之を受けんとするものに甚だ惡しきを憂ひ居たりしが客年三月頃より喉頭及肺結核病にかゝり不幸にも本月十一日病死したり然るに病愈危篤に迫り到底恢復の見込なきに至り、家族を枕邊に會して死體解剖の事を遺言し、且之を書面に造り主人篤太郎に與へて安然として瞑目せり、之によりて楠病院にては市中の醫師醫學生新聞社員等を會して之を執行せられ尚十三日葬送の際は楠院長より祭祀料として金若干造花一個同院職員より造花一對を寄送し會葬者は親戚朋友及醫師等百有餘名にして皆な婆の芳志に感激せりと、

女報

淡海子編

●慈仁の恩給　寒氣の砌　皇后陛下本社病院救助患者の狀況に爲思召左の通り恩賜の命を蒙り無究の天恩仰くも尙餘りありと云べし依て本社は病院長に移牒して之れを頒與せしに何れも感泣の外なかりし、

一二タ子縞　貳拾反　　一木綿裏地　二十反　　一金六圓　裁縫料

寒氣の砌に付　皇后陛下其病院救助患者の狀況を被爲　思召前記の通り賜候間可然御取計相成度此段申入候也

廿六年一月十三日

日本赤十字社長　子爵佐　野　常　民　殿

皇后宮大夫　子爵香　川　敬　三

●淑女　小石川茗荷谷町廿二番地士族神谷道泰氏の二女、清堂女史は今茲芳紀二八の春を迎へ花も耻らう風情なるが幼きより學を好み螢雪の苦を積みて、今は和漢の學に通じ殊に漢學に長ぜり、父道泰氏は元柔術の師範たりしかば柔術にも通じ、先年二人の强盜押入りし時は女史の手練に肝を奪はれ一物も取得ずして逃失たり、昨年以來繪畫に志し懸賞書畫會に於て一等賞を得たるとあり、殊に孝道に厚ければ双親の寵愛大方ならず。(給入自由)

●婦人會　函館婦人會は志しある人々集り婦人の獎風を矯め位置を進めんとて組織せし會なるが、一昨日函館女學校にて集會を催したるに數十名の出席あり吉松坂、山田の諸氏講話あり種々余興の催しもありたり。

●尺未亡人の寄附　故尺振八氏の朋友門生等相謀りて昨年十一月廿七日、同氏の七周年祭を柳橋龜清樓に營みたるに、其節集まりたる香奠等十五圓餘ありたれば、發起人より之を同未亡人菊子夫人に贈りたるに同夫人は直ちに明治女學校へ寄附したりと云ふ。

●群馬縣の廢娼運動　群馬縣青年有志者の組織に係る上毛青年會員石島良三郎、宮前右太郎の二氏は同縣下に於ける廢娼運動の委員として、此程上京し不日右に關する請願書を兩院に呈出する筈なり。

●高等女學校　最近の統計集誌によれば、廿三年度高等女學校の數は、三拾壹、其教員の數は、三百三拾壹、其生徒の數は、三千百二十、其卒業生は、三百三拾二なりき。

●米國日本人會の踐婦豫防案　米國シカゴ府在留の本邦人は數年前より日本人會を組織せり時々重要の事項を討議し居りしが、今回の博覽會に附て左の如き決議をなしたり、博覽會は獨り美術工藝品の出品場たるのみならず、勢ひ世界異人種の博覽會たらざるべからず、此際大に我國民固有の氣質と品格とを示して社交上及び國際上能く其威嚴を保ち彼外人をして一層尊敬の感を起さしむる事を勉めざる可らず、然るに若し此機に乘じ不義の利を貪らんため他地方より本邦醜業婦の入込み來ることなどあらば、本邦人の聲響を毀傷することと頗る大にして、折角の苦心を空うするは勿論延て國際上に及す形響も少からざるを慮り、今回日本人會の通常會に於て醜業婦豫防案の出るや全會一致を以て之を可決し、特に十文字大元、吉谷竹之助、山家吉彦、佐々木常之助、生田益雄の五名を委員に選び、一切の準備及び是が決行を託し、爾後該委員は東西に奔走して各地有力家、各官廳の協力を求め、且シカゴ府に於ては已に其筋の官吏及探偵掛りへも打合せをなし最も嚴重に手配をなし居ることなれば、如何なる手段に依るも彼等賤業婦は到底侵入すること難かるべしと或人は物語りぬ。(婦人教育會雜誌)

●婦人會議　米國なる萬國婦人會議は來年五月に開かるべき、世界婦人總會議の準備に取り掛かれり、此の會議の日數は、一週間以上にも及ぶべく、其內一回は大劇場を借りて公開の集會を催し、五回はシカゴ美術公堂に於て開かるゝ由、吾人は此の一大婦人會議の擧を聞いて米國婦人の勇氣と熱心とを感ずると共に、益我國婦人の卑屈冷濟なる精神を嘆ぜずんばあらず、吾人は我國婦人も亦た米國婦人の如く、一致團結して女子の大問題を研究せんことを望む。(女子與風雜誌)

●スノーデーン女史の歸英　同女史は聖ヒルダ傳道會中にあり、香蘭女學校の教授を兼れ婦人傳道に從事せられしこと數年、殊に牛込昇天教會の爲めには大に盡す所あり、會員の屬望甚だ篤く婦人傳道には多望なる日を來せし折柄、同女史は今將に去て歸英せられんとす、發途の期は大凡二十日頃ならんと聞きぬ別を惜むもの獨り昇天教會員のみならず、女學校生徒のみならず、吾人又之を惜んで止まざるなり。

●香蘭女學校文學朗讀會　は昨十二月廿日同校に於て開かれ、諸生徒の文章朗讀は流石に平日の修養勉學の効あらはれて賴毋數感ぜられたり、當日の來賓には內外の教職傳道士貴婦人、及び生徒の父兄あり、朗讀會後一同に茶菓の饗ありと。(二件日曜叢誌)

●女教員の服制　福島小學校にては從來女生徒の服裝甚だ華飾に流るゝの弊ありて、貧困者の子女は自然就學の途絶ゆるの傾きあり、且つ大祭祝日の如きは此れ等の事情より欠席する者往々あり、幼稚園の幼兒すら其の粗服を耻づる等種々弊害の起りたるより之れが矯正策を考究せるに、先づ教員の服裝より改むることこそ得策なりとて左の規約を結び、客年十二月一日より實行せりと。

生徒をして儉素の風に薰染せしめ且つ父兄をして衣服の爲めに兒童の就學を躊躇する如きことなからしむる爲め玆に女子教員の服制を規約すること左の如し

一、通常服は木綿とす、羽織は必ずしも此の限りにあらず。
一、禮服は黑木綿の紋付を正服とす、但正服を用ゐ難き時は木綿着物に黑木綿の紋付羽織を着すべし

蓋し美事なり、世の貧邊學校の當局者、省みるところありて可也。(新教育)

●斷然廢止しては如何　鹿兒島縣知事大迫子は、貸座敷營業地の事に付ては余程苦心し居らるゝが如し、貸坐敷營業地の事が夫れ丈け大迫子の心を苦しむる事ならば寧ろ斷然廢止したる方宜しかる可しと云へる者多し。(三件鹿兒島新聞)

●女紅場　四日市北町の貸座敷は數年前同町會議所を借受け、女紅場を設けて教師を聘し娼妓に裁縫幷に習字の教授をなし居りしに、都合ありて一時中止となり居たるを、今回四日市警察署長野口能毅氏より貸坐敷一同へ訓諭奬勵する處ありしに付き、愈よ來る十五日より再び開設するとのこと。

●女德の改良　愛媛縣久米郡邊にては此の三四年前まで遊藝に耽るもの多く、互に競ふて女子に歌舞などを敎へ中等以上のものは、諸處の客席に子女を連れ行き、藝妓同樣に歌舞せしめ一席の假賞を得るを以て此の上なき面目と誤解し居たるもの往々あり、左れば學校教育は其の餘業となし、學校教育は貧民の子女に限るものゝ如く思ひたりしに、現今に至ては更に其の弊風を絕ち主として家庭と學校との教育を重んじ、又手藝を教ゆるの必要を悟り裁縫を授くるを以て女子の專務となし、相共に奬勵すると恰も一時の歌舞に於けるが如く、從ふて遊藝を賤むの風を生ぜり、川上驛地方に於て尤も然るものゝ如しこれは時勢の然らしむる所とは云へ、實際當時女德の腐敗したるを認めたるが最大原因なりと云へり、何にせよ喜ぶべき事なり。(愛媛新報)

●姙娠工婦使役禁止法　佛國代議院は諸製造場に於ける工婦中其產前一個月及產後一個月の間、之が使役を禁ずる法案を可決したり該法に據れば此二個月の間賃錢の間半額を給與し、其一半は政府より一半は州廳より下付すべしと云ふ。(官報)

●吉祥女學校　北海道函館港には佛教主義なる、六和女學校、及び惠愛學校等ありしと雖も、最も其盛なるものは吉祥女學校にてありし、而して該校は校舍の狹きゆへ昨年春頃增築せしも、忽ち入校者の申込ありしが爲め、今亦不便を感ずるに至りきと、玆を以ても吉祥校の日を追て盛大に趣くは期して待つべきなり、同校現在生は四百名以上なりとぞ。(御國の母)

●婦女を欺いて外國に送る　醜を醜とせざる無廉耻の輩が婦女を欺いて、海外に誘ひ醜業を爲さしむるは、心有る者の皆な惡み且憂ふる所なるが、長崎、廣嶋等は既に奸策に懲りて應ずる者無きより、惡漢どもは方向を轉じて、越後地方に入込み舊臘より長岡邊に足を留めて、橫濱の商人と詐り、橫須賀の紡績會社の工女を募ると唱へ、二年或は三年の極にて十圓乃至十五圓の前借を與へて甘く買込み橫濱より米國若くは上海へ送る由にて、既に七十人ばかり兩三度も橫濱へ送りしといふ。

●パーネル氏未亡人の身代限　愛蘭の無冠王故パーネル氏の未亡人は、今回破產裁判所に身代限の訴願を提出せしに付、此事の世上に發表するや人皆以爲らく是れ全くパーネル黨の巴里資金に關係あるものなりと、然れども一家の都合より是に至りしものに外ならざるが如し、パ氏の死するや家資裕ならずして毫も餘財を遺さず、實に此時に於て氏の一家には埋葬の料に供すべき資金なかりしが爲め、故首領の同僚レッドモンド、マホニー、ハーリントンの三氏が、パ氏遺族の爲めに其葬資を償ひし次第なりと云ふ、現にパ氏は今より數年前アボンデールに於る祖先傳來の家宅の質入となり居りたるを受戾し、且つ其所領地中の鑛物を採掘せんと務めて其目的を達せざりしが爲め、遂に四萬磅(我二十七萬圓)の巨額を徒費したるとあり、今やパ氏未亡人は、レッドヒルに於て隱逸の生涯を送れども無冠王生前の負債に堪へ得ずして、身代限の訴願を爲すの已むを得ざるものと覺えたり、此の未亡人とは即ち前のオーシー夫人にして、パ氏と不法の緣繫ありとの取沙汰發表せし時は隨分世人の耳目を動かせしも前良人(即ちオーシー大佐)より離婚を訴へられて敗訴となり、目的の如く意中の無冠王と伉儷を契りし後未だ幾何ならずして、新良人パ氏は病歿し其屍尚ほ暖かなるに差しもに名高かりしパーネル黨は四分五裂して、愛蘭黨の名聲は敵黨の手に落ち、未亡人亦身代限を差出さゞるを得ざるの悲境に陷いる英雄才女の末路亦憐むべき哉。(國會)

●カルクス女史　は昨十二月十九日朝橫濱に安着し、午後二時五十五分の列車にて新橋に着き、直に自邸に歸られたり、女史に隨伴したるものは、丸山あい子の外二人の婦人もありたるやに見受けたり。

●令孃美談　世は澆季になりぬとて老ひたる人の眉ひそむるが中にもかゝる姉妹はおはしけり、大審院判事正六位勳五等小杉直吉氏の令孃に、何子とて姉君は十八九妹君は三つ四つおくれ玉へるがあり、雨の日風の晨も缺かし玉ふとはなく最と夙く起き出でゝは、左るべき學校へ通學せらるゝよしなるが、心ざま世になく優しうおはせば出入るものにも大方ならず慇懃を加て打よろこぶ樣を見ては此上なう嬉しとなんおぼしける、或る日のことなりけり姉君は妹君を招き玉ふて、何れ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は嫁入りすべき身の何時まで婢どもの手にかしづかれんは零落れたらんときの悔みなり、榮枯盛衰は世の中の常となん云へば、月もたまらぬ堰生の床に嫛と云はれ子と呼ばれんとき馴れぬ手業と米炊ぐ桶に涙そゝぐも心憂く、今日よりは二人して朝夕の炊事ふき掃除さては衣服縫ふ業膳部しつらふ術なんど慣はんことこそ思ひ侍るなれ、和女は如何におぼし玉ふやとて促がし玉へばいみじくもおぼし立たせ玉ひけるよとて、其翌日より婢どもの先に立つゝ水汲みはしりそゝぎなど何くれとなく立ち働き玉ふとは、書生車夫なんど殘るかたなく給持を濟して、借て手を引き合ふて通學せらるゝよし冥加のほども怖ろしと車夫なるものゝ涙こぼすも道理なり。(御國の母)

●米國婦人會の照會　米國婦人會にては今回婦人の組織せる慈善智識衞生、其他社會及び道德上の改良を目的とする諸協會の全書を編纂する計畫あり、日本婦人會へも其材料の寄送を照會し來りし趣きにて、會長より各府縣廳に管內婦人諸協會の取調を依賴したり、當府にては更に郡區役所に其取調を命じたりと、嗚呼何ぞ其れ事を計るの周到なる、東洋女子が其身僅かに、戶外に出つるを嫌ひ區々として頭髮簪櫛の如何に是非を評し、心身を勞して此等偉大必要の業務に注意せざるは、豈に文明の任務を知るの女子と云ふべけんや、東洋女子請ふ之れを見て奮起せよ。(與風)

●北白川宮妃富子殿下の賢德　去二十五日御豫定通り、京都御發途熊本に向はせられたる、北白川宮御息所富子殿下には、前日各陵墓へ御參拜の上御親族方を御訪問あらせられたる節、御親族の中には殿下は始めての御來京なれば切めて一兩日、御滯在遊ばされ有名なる場所丈けなりとも、御覽あれかしと勸め參らせしに、殿下には御容を改めさせ給ひ、御厚意は辱く侍れど、宮殿下には此寒さをも厭はせられず、遙々熊本へ御出張遊ばす際、妾當地に留まること本意なく侍り又重ねて來京する事もあるべしと御答あらせられ、現に知恩院山內なる久我尼公御訪問の砌にも同院本堂及び坊丈へもお立寄り遊ばさず、又大佛への御立寄も必竟馬蹄を休ませんとの思食に出たるにて、同日は五時半過御歸館あらせられ、廿五日の朝も寒氣を厭はせられず早朝御出發在らせられたりと承りぬ、尙ほ神戶にても御遊覽遊ばさず同港へ御泊の上翌朝同港御出發門司港へ御着、同地御一泊翌日は熊本へ御着在らせらるゝ御都合なりと。(時事)

●四ッ谷厚誼會　にては去る二十八日午後六時より、四ッ谷小學校に於て衞生教育演說を開かれ、米國理學士高階苑治氏は、女子の高等教育に就て演せられたりと云ふ。

●烈公夫人の逝去　水戶烈公の夫人、登美宮吉子の方(有栖川氏)は本年九十歲の高齡にて至極壯健なりしが去る頃より風邪に罹り次第に衰弱して去二十七日に逝去されたり、病中、皇后陛下幷に、皇太子殿下より御見舞として下賜品あり、德川慶喜公も急報に接して靜岡より出京看護せられたるよし、尙ほ葬式は本月五六日頃(日限は未た確定せず)執行し向島小梅なる德川邸出棺上野より滊車にて水戶へ着し同家累代の墳墓地、常陸久慈部瑞龍山なる烈公の墓側に葬る筈なりと云ふ。

○烈女村岡紀念碑の建設　維新の際王事に勤めて力ありし、近衞家の老女津崎村岡女史の紀念碑建設の事に付ては、曾て舊公家華族家士族家二三の人々に於て計畫中なりし處、頃日彫刻も出來上りたれば、京都葛野郡嵯峨村字上嵯峨大覺寺境內廣澤池畔に建設する事に決す。

●青山少將と娼廓　今度愛知縣會にては名古屋を初め縣下所在の娼廓を悉皆郊外に移轉せしめ、淫風の蔓延を防遏するの議決を爲したるが、同地撰出の代議士青山朗氏(陸軍少將)は其住所が同娼廓の近傍なるが爲めに昨今衆議院の停會を幸ひとし竊かに同地に歸り其酒樓に重なる娼廓の樓主等を招き陰かに右移轉の議決に反對し非移轉の運動を爲さんことを謀りたりとのこと同地の有志者等の耳に入りたるより、痛く激昂を惹起し乃ち數名の壯士等は、同氏の居宅に詰め掛け氏が私事の爲めに公事を措くの非を責め、更に辭職の勸告を初めたるより氏は又々即夜竊かに東京に赴きたる由なるが氏、自らは一切其歸鄉を秘し居ると云ふ。(日本)

●娼妓の黴毒患者　最近の函館新聞に揭ぐる處によれば、同地蓬萊、蓬臺町の兩廓に於て昨年中娼妓の有毒入院患者は、左の通りなりと云ふ、豈に其害毒の他に及ぼすもの尠少なりと云ふを得んや、存娼者少しく省みて可なり、

眞性黴毒	硬性下疳	六三
	扰贅	二二
	發性諸症	一五
	硬性腺腫	一一
	骨膜炎	二
	虹彩炎	二
假性黴毒	軟性下疳	一五八
	咽喉潰瘍	二二
	水脈腺炎	二一
	尿道炎	一八
	子宮潰瘍	二〇
花柳性雜症	白帶下	一八
	糜爛	一二
	剝脱	一一
	痔疾	二〇
	疥癬	四
計		四二八

正　誤

本月廿一日發兌乙の卷第三百三拾六號女報欄內に揭せし、師範學校女子部廢止の流行せし一項は、事實無根の由鳥取縣內務部より達しに相成候に付全文を揭げて茲に正誤候也

本月廿一日發兌女學雜誌第三百三十六號女報欄內へ師範學校女子部廢止の流行さ題し本縣にも廢止說に就て激論を唱ふるもの多き旨記載相成居候處右は事實無根の事に候條正誤相成度此段申進候也

明治廿六年一月廿六日　鳥取縣內務部

女學雜誌社御中

孤兒之友

齋勤子編

孤女學院報告

第十二月分

寄附金

金四圓 米國 無名氏
金壹圓卅七錢 上州 島村美以教會
金拾貳圓六十五錢 東京 ミセスモリス其他フレンド女學校有志（兼友氏を經て）
金壹圓 帝國大學高等中學校 松村鍬三 島田正已 兩氏
金卅錢 東京 明治女學校某氏
金拾圓（浮出スタンプ代）東京 無名氏
金六圓 東京 三一教會外國婦人會
金壹圓五拾錢 東京 婦人老人會
金五十錢 明治女學校 石橋いせ子
金拾錢 上州 田島みれ子
金貳拾錢 全 田島ひさ子
金壹圓 全 田島ませ子
金壹圓 全 田島たみ子
金壹圓 全 和田くに子
金廿一錢 仙臺 本間亮一郎氏
金拾四錢 三重 河合まき子
金壹圓九十五錢 長崎 婦人祈禱會
金貳圓拾錢（牛乳代）東京 明治女學校愛の睦
金四圓三拾錢 横濱 フェーリス和英女學校王女會
金廿錢 千葉 白井くに子
金四拾錢 千葉 立石ひさ子
金四拾錢 千葉 無名氏
金拾錢 千葉 馬籠氏
金廿錢 千葉 簑野氏
金五錢 千葉 遠藤氏
金拾錢 千葉 永島氏

以上千葉の分藤原金子氏の手を經て

金五圓（建築費）築地 紅葉會
金貳圓五十錢（クリスマス費）築地 傳道女館
金三圓 築地 監督ウヰリヤムス
金三圓（クリスマス費）全 全氏
金貳圓 全 ミス、フルベッキ
金壹圓 全 ベーヤ氏
金五十錢 全 小宮珠子
金五十錢 全 名出さらゑ子
金七十二錢 米國 アーマー、ミスシヨン一少年
金七十二錢 米國 榊なつ子
金壹圓 東京 河久保かれ子
金壹圓 甲州 分部盛之氏
金五十錢 東京 無名氏
金壹圓五十錢 大坂 浪華女學校
金六十錢（クリスマス費）赤間關 日本基督教會姉妹中
金五十錢 大坂 片本りう子
金貳圓 東京 ミス、ペリー
金壹圓 東京 チング氏
金拾錢 三神學校 菊田氏
金拾錢 全 大谷氏
金八錢 牛込 矢來町糸子
金壹圓六十錢 東京 宮原要吉氏（時計修繕收入）
金一圓 三一神學校 伴氏
金百廿圓七十錢 寄附品賣却代
金三百四十圓 大須賀寄附所有財產賣却代

右合計金五百四十一圓三拾九錢

支出

金廿四圓八十錢 米代
金六圓四十四錢三厘 肉八百屋物
金拾壹圓七十六錢八厘 味噌、醬油、炭、薪、油其他雜品
金五圓三拾四錢貳厘 貯藏用薪代
金五圓五十四錢 乳兒及牛乳代
金貳圓廿三錢 藥舖拂
金四圓 醫師車代
金壹圓九十錢 履物代
金壹圓拾八錢 足袋代
金三圓廿六錢 郵稅及金員物品發着運賃
金廿錢 新聞代
金四圓九十一錢 器具代
金八圓 諸給料
金七十七錢五厘 障子紙
金壹圓八十錢 クリスマス費
金五十三錢 車賃
金六十錢 竹代
金七圓五十錢 寄附浮出スタンプ代
金拾貳圓 職業部資金中編入
金貳拾六圓六十三錢壹厘 修繕其他雜用
金四百七拾八圓廿四錢九厘 建築費

右合計六百七圓七拾五錢四厘

第十二月中決算

金五百四十一圓三十九錢 十二月中寄附金
金百五十八圓八十錢五厘 前月ヨリ越高
小計七百圓十九錢五厘
金六百七圓七十五錢四厘 十二月分支出高
差引殘金九拾貳圓四十四錢壹厘 廿六年度へ繰越

明治廿五年一ヨリ十二月マデ寄附總計
金二千三百四十八圓六十四錢六厘
全 支出總計
金二千二百五十六圓廿錢五厘
差引殘金九拾貳圓四十四錢壹厘 廿六年度へ越高

寄附物品

建家（八疊、三疊外押入二、便所、入口）壹棟、ストーヴ一式 有志諸氏
寢臺、藤製椅子 壹 棟梁 非上氏
茶器 壹揃 全 氏
三疊敷物 壹枚 職人中
右大須賀川さして寄附
菓子三袋 東京 伊東祐賢氏
鷄三羽 東京 無名氏
菓子壹袋 全 藤田龍藏氏
メサシ一籠 全 岡野氏
綿入一、精袢袖一、足袋一、手袋一、 全 女子學院內某氏

襦袢一、羽織一、綿入一、袷一、足袋十三　全　婦人老會
綿入七、羽織一、帶一、ヒモ四、カード其他クリスマス用種々　全　紅葉會
鮭二尾　東京　無名氏
クリスマス贈物一同へ　全　ゲッブ氏
蜜柑壹箱　全　井上氏
全壹箱　全　巌本氏
全壹箱菓十　全　ゲッブ氏
菓子五百十五人分　全　三一教會日曜學校
蜜柑壹箱　全　立教女學校
椅子六、机六、額二、其他雜品　全　女子學院
額面一、石鹸二箱、雜書　全　明治女學校愛之睦
綿入一、ヨダレカケ二、足袋三　全　竹中氏
手拭地足袋八　全　立教女學校小澤氏
石筆二十五、鉛筆二ダ・筆十、石鹸八、手拭白紙九　東京　無名氏
半テン一、綿入一、袷二、帶一、　大坂　浪華女學校傳道會
筒袖二、腰卷一、足袋二、[illegible]一　矢來町糸子
基督教雜書廿三　東京　中澤信太郎氏

職業部

金四拾九圓三十一錢四厘　第十一十二月收入高
金拾四圓三錢四厘　全代假未着之分
小計六拾三圓三十四錢八厘
金五拾圓四十八錢六厘　第十一十二月支出高
有糸ヨリ器械及原料品買入代
總員四十六名

孤女學院

府下北豐島郡瀧野川村

○北海孤兒院十二月分報告

○收入第一寄附品

一日本禁酒會雜誌　横濱　林翁
一青年會月報　東京　基督教徒青年會
一女學雜誌　東京　孤兒之友
一落之音　全　全氏
一新約全書九册　箱館　某氏
一新撰讃美歌一册　紋鼈　増田大吉
一晒綿七斤　全　全
一繪本十五册　全　全
一鼠取器械一　全　全
一菓子一袋　全　齋藤眞知
一蜜柑一箱　全　全
一煉瓦三　全　全
一昆布　全　全
一日本藥局備考　兵庫縣　小橋勝之助
一芋洗籠一　黄金蘂村　齋藤錢三郎
一鰹引鮭二本　紋鼈　村木孝英
一七面鳥一羽　洞爺　三橋政之
一カード十五枚　箱館　伊原豐次郎
一コーヒー砂糖　紋鼈　小山田虔

同第二寄付金

一金壹圓　東京　市川榮子
一金壹圓　紋鼈　菊地ハギ子
一金壹圓五拾錢　盛岡　ウイン嬢
一金七拾錢　全　ビヤソン氏
一金壹圓　神奈川縣　美以教會有志者
一金三圓　全　山ノ井惠助
一金壹圓　横濱　山ノ井久右衛門
一金壹圓　全　林クワ子取次
一金五拾錢　全　全取次
一金壹圓十五錢　仙台　宮本六兵衛
一金五十錢　全　眞山眞
一金五圓　黄金蘂村　齋藤鉄三郎
一金二圓　紋鼈　黒川大次郎
一金二圓　紋鼈　黒川晋
一金拾錢　洞爺　山田利平
一金拾錢　全　欽山貝五郎
一金拾錢　全　香川忠八
一金拾錢　全　岩崎又四郎
一金拾錢　全　寺脇常造
一金拾錢　全　白川瀧治
一金拾錢　全　大久保逸原
一金拾錢　全　西代助造
一金拾錢　全　上野角治
一金拾錢　全　早川百造
一金拾錢　全　今井佐吉
一金拾錢　全　今村石右衛門
一金拾錢　全　今村虎造
一金拾錢　全　大西藤太
一金拾錢　全　坂下孫治
一金拾錢　全　神原彌吉
一金拾圓　箱館　キンボール氏
一金二拾圓　仙台　ホーイ氏
一金拾二圓五拾錢　札幌　島田操
一金二圓　名古屋　岩永義太郎
一金拾圓七拾壹錢　在米國　日本長老教會
一金壹圓　東京　水野シゲ子

同第三賣下代金

一金四拾錢　靴下一足
一金七拾錢　牛チヤン七枚
一金拾八圓七拾二錢　小豆拾俵
一金拾六圓五拾二錢　大豆拾四俵
一金四圓八十錢　鶉豆三俵
一金八拾錢　書籍代
總計百貳拾壹圓四拾五錢

○支出

一金六拾二圓九錢五厘　食物類
一金貳拾七圓五拾八錢五厘　衣服類
一金拾貳圓八錢五厘　農具及家具
一金三圓三拾四錢六厘　筆墨紙類
一金拾圓拾五錢四厘　院舍建築費殘分
一金拾五圓八拾錢　移轉費
一金六圓廿二錢　切手及ハガキ
一金壹圓廿二錢　藥代
一金二十五錢　教育用具
一金二圓拾錢　鷄卵紙
一金二圓二十錢　石油壹箱
一金三圓二十錢　秋運賃
一金五圓四十二錢　諸雜費
總計金百五拾壹圓九拾錢五厘
差引不足金三十圓四十五錢五厘　準備金ヨリ支出

明治廿六年一月

北海道虻田郡虻田村洞爺湖畔
北海孤兒院

正誤

前號孤兒の友取次義捐金第六回報告中金拾圓也無名氏寄附孤女學院へとあるは博愛社に正す金壹圓也高橋久野氏同孤女學院へとあるは岡山孤兒院に正す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一月卅一日發行

女學雜誌

文學界

第壹號要目

琵琶法師（悲曲） 古藤庵

吉田兼好 禿木子

阿佛尼 天知子

文章道 巖本善治

富嶽の詩神を想ふ 北村透谷

漫詩 古藤庵

（附錄）女歌仙家集講義 大和田建樹

兼好清師家集

阿佛乳母の文

	府	外
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	卅三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢

第壹號は喝采の下に迎えられ賣切に相成今般再版成りたれば續々御購讀あらんことを請ふ

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

新年の贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土產遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢

鈴木弘恭大人著（半紙判日本綴）

再版 增補

文法口授

一名和文獨案內

特別賣價 金拾二錢 郵便稅 金二錢

目錄

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯并に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京下六番町 女學雜誌社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

增訂
三版

故近藤賢三君 高橋要亮君同著

經濟
秘法

廢物利用

上下合本

正價金三拾五錢
郵税金四錢

目次

魚類の廢物より石鹼を製する事
藻を以て紙を製する事
魚類にて紙を製する事
鯨の上肉より蠟を採る事
海草より砂糖を採製する事
牛馬家の血液より大利を得る事
馬肉を食用にすべき事
牛の毛用ひ方種々ある事
松樹よりテレビン油を採製する事
松の木にて綿又は布を造る事
茗荷にて糸を製する新法の事
蒲草より綿を採る事
桑の皮より綿を採る事
玉蜀黍の莖より糖蜜を製する事
松葉を布團綿を製する事
甘藷は用ひ方にて大利を得へき事
石決明、タガヒ等の介殼を釦鈕となす事
澁柿を用て砂糖を製する事
石を煮て和らかにして器物を造る事
青竹を煮て白色にする事
角を煮て糊餅の如くし之を器に作る事
玉蜀黍の莖をコルクに代用する事
槲實にて食物を製する事
食物を新鮮の儘にて貯へ置く事
牛肉鳥肉を柔軟に煮る事
桑の皮より紙を製する事
馬鈴薯より乾酪を製する事
廢衣より藍を製する事
古靴の利用法
馬鈴薯にて澱粉を採る事
酒糟にて醬油を造る事
柚餅子の製法
落花生の搾粕にて味噌を製する事
藤蔓にて布を製する事
獸角の細工物に著色する事
紙を以て夜具を製する事
大口魚の無臭肝油を製する事
杉の葉にて線香を製する事
眞珠を摸造する事
蠶にて綿を製する事
橄欖樹より護謨を採る事
馬鈴薯よりアラビヤ護謨を製する事
蘆葦を以て板材を製する發明
菓實よりアルコールを製する事
床の下の土より硝石を取る事
生骨の煮汁より膠を採る事
蛙の皮の利用する事
綿布の油汚を脱く事
衣服に汚點の附きたるを脱く事
白フランネルを洗濯する事

其他百四拾六件

發賣

東京市麴町區
下六番町六番地

女學雜誌社

嚴本善治君編

女學叢書 木村鐙子小傳

定價金八錢
郵税金貳錢

島田三郎君の序に曰（前略）余年十七八田口卯吉君と駿州の郷校に相知り其后君と前后東京に出てゝ相往來す二人窮する甚くして學資乏絶を告ぐること屢々なり予君の居に到るに屋傾き壁破れて一見其家道の衰零を知るべし然れ共其待遇の豐厚は君の世計に過ぐるあるを覺ゆ怪みて之を他の友人に語り亦然りといふ後に至りて其婦鐙子君が田口君の友を待つに意を致すによれることを知れり予の鐙君を親く知るは實に近年に在りと雖予鐙子君の知遇を得るは實に十年以前に在りて嘗て之を知らざりしなり田口君常に言ふ予の成立は姉の助による者多しと此言眞に然り今や田口君世に名ありて家道も亦興れり而して鐙子君は逝きぬ悲ひ哉（中略）嗚呼鐙子君の如きは之を花に比ふるに唯梅の是に當るを得へき乎（下略）

東京下六番町

女學雜誌社

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述

増補訂正 第三版

皇后宮御覽

はゝのつとめ

親の巻 妊婦産婦の心得 定價金三十錢（郵税二錢）

子の巻 育兒法 定價金四十錢（郵税四錢）

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衞生書はり、華族女學校醫科大家産科婦人小兒科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假名付にして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

東京下六番町

女學雜誌社

●生徒募集

今般本校諸學級 寄宿 通學 幷ニ附屬 小學幼稚園ヘ入學ヲ許ス

麹町區上二番町卅三番地

女子學院

附屬 幼稚園

◉◉◉毎月一回（十五日）發行◉◉◉

（●速記彙報●）

正價一冊八鐵 ● 六冊前金四十五錢 ● 全國無遞送料

速記彙報第四十八ニハ
帝國議會議事筆記概論
現今速記術進歩ノ程度
帝國議會ニ於ケル國務大臣及議員ノ演説振リ
松林伯圓翁講演演説
『目出鯛話』演説者ニ要スル注意、文字ト語音、發意學、新聞紙ノ筆記振リ、其他速記及演説ニ關スル記事ヲ掲グ。

東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

同志社文學

明治廿六年一月廿三日　第六十一號

目次

○故新島先生之筆蹟

同志社文學

○故艮之辭

○堅固なる品性……小崎弘道

論說

○古代佛敎ノ心意說……哲學博士　森田久萬人

○普通敎育論(二)敎育と宗敎……柏木義圓

○大坂築港と神戸の將來……六無散人

講演

○何ぞや(承前)……文學士　三宅雄次郎氏

批評

○新作萩桔梗(雲峰生)○女學雜誌乙の卷新年附錄(同)○ビデニチー(同)○大觀(同)○天啓敎と聖書(同)○國民の友新年附錄(同)○女學雜誌白表紙附錄(同)○家庭雜誌新年附錄(同)

雜錄

○請願歸朝之書(故新島襄)○偉人慨世の涙(雲峯生)○石川丈山(美軒子)○懷舊瑣談(素軒學人)○蓮池遊(哲學博士湯淺吉郎)○淸經(菊水子)○詩二首(谷喬)

●明治二十六年を迎ふ●悲を以て暮れ悲を以て明く●學者の榮譽●師範學校女子部●醜業婦の渡米●福島少佐を歡迎せんとす●植木枝盛氏の建碑●煙管鐘●第四回博覽會●文學界の傾向●組合敎會傳道會社●文學者の身價●日本の腦充血病●文學界の倫盜●故總長の遺德●本誌の小歷史●同志社記事數件

●山本覺馬翁之略傳及逸話

▲前號には山本覺馬翁の肖像を挿入すべし

定價表

一冊　前金五　錢　地方　前金五錢五厘

六冊(半ヶ年)前金廿八錢　郵稅　前金三十一錢

十二冊(一ヶ年)前金五十四錢　共　前金六十錢

廣告料一行五錢但郵便切手なれば五厘切手に限る一割增

發行所　京都同志社內　同志社文學社

精神

每月二回發行

一部定價金五錢五厘

六部前金二十三錢

十二部前金六十錢

二十四部前金一圓十錢

全國無遞送料

●精神○貴族院の地位○社界の優待

●時評　尤も斬新　尤も警抜

●特別寄書○華族(飯田旗山)○豫算法論(稻波鈎三郎)

●史論○皆川淇園(咄黨居士)○古代哲學小史(加藤熊一郎)

●論叢○條約改正の私見(致爽軒主人)○社會問題(堀内靜宇)

●諷叢○應用大學を設くるの議(戰國策次)

●文苑○詩數首

●漫錄○豫算に對する歐州學者の談論(金子堅太郎)○新春雜記(三界一門樓主人)

●帝國議會●時事摘要●外報

發行所　東京市四谷區愛住町四十七番地　精神社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻譯

(リツトル。ロード。フオントルロイ)

小公子

小供のよみ本

再版

賣捌所

新教育

時田愛次郎君の批評

巖本善治氏の妻女が譯述する所にして、巻首は茫々として物足らぬ心地せるゝも、讀み去り讀み來りて五十一頁に至り、代言人の言を見る頃は、實にこの眞情を露出して、親く目に之れを見るが如き思ひあり、セドリックが無邪氣なる談話中、自ら風敎の意味を寫し、讀者をして、覺えず絶叫せしむ、近來稀有の珍書也。

定價金三拾八錢の所今回新年の贈物として特別金廿八錢(郵税金八錢)に引下候間續々購求被下度候

東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戸◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舎

女學雜誌社出版書

西洋女禮　全

目錄

第一章　婦人紹介の事
第二章　婦人書面紹介の事
第三章　婦人訪問及名刺の事
第四章　婦人會話の事
第五章　婦人案内の事
第六章　婦人書狀の事
第七章　婦人散歩の事
第八章　婦人裝飾の事
第九章　婦人朝夕宴會の事
第十章　卓食上の心得の事
第十一章　寄遇の心得の事
第十二章　音信及贈物の心得
第十三章　主婦客を過するの事
第十四章　婚姻に關する心得

定價金拾貮錢
郵税なし

女學雜誌社出版書

兒育草　全

本書は育兒に關する一切の事を、極めて平易に、何人にも解し易き爲めに、問答躰になし第拾四回にて完結せり、世の母たる人是非一本を供へ玉へ。

定價金貮拾錢
郵税なし

女學雜誌社出版書

子供のはなし　全

定價金五錢
郵税金貮錢

目次

第壹回　田舍音樂師
第貮回　菫の君
第三回　旅と旅人
第四回　風と日の喧嘩
第五回　ハイ〳〵トタヾイマ
第六回　カンとクツドの話
第七回　王にも勝てる人々
第八回　母の愛
第九回　柔順なる娘
第十回　英雄の所業

東京下六番町
女學雜誌社

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

百人一首講義

正價金廿八錢　郵稅四錢

第四版

御高評の第四版今や賣切れんとす今回又々第五版印刷中希新

歳贈物に續々御購求あらんとを請ふ

女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市錦町二丁目	武藏屋藤藏
同　尾張町二丁目	東海堂
同　獺左衛門町	騰々堂
同　表神保町	東京堂
同　出雲町	警醒社
同　鐵砲町	指金堂
同　元富士町	盛春堂
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣横濱市	共同新聞發賣合社
神奈川縣横濱市	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同　新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黒屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麴町區上六番町	日盛堂
同　同	福音舍
同　飯田町	三文字屋
同　同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同　同	育柳堂
同　雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同　同	正導舍
同　肴町	深田彌兵衛
本郷區眞砂町	文壽堂
同　同	就本堂
同　富士前町	解明堂
同　同	盛春堂
牛込區岩戸町	松英堂
下谷區東黒門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同　旅籠町一丁目	横本
同　鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花屋
芝區　櫻田本郷町	鈴木新兵衛
同　南佐久間町	栗原
同　同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
同　同	飯田
京橋區出雲町	金盛堂
同	山田堂
本郷區天神町	吹進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同　錦町二丁目	眞故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

護教社移轉廣告

今回京橋區竹川町九番地より左記の所へ移轉す以后通信注文其他一切の郵書等同所へ御發送被下度候

東京赤坂區仲の町二番地

山路彌吉方

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅	金五厘	

廣告料及無料廣告

一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三